

第2節 吉田構内(吉田遺跡)の調査

1. 経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟新営工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内K-21区

調査面積 117㎡

調査期間 平成21年4月13日～24日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯(図4、写真7・8)

吉田構内南部、経済学部E棟南側駐車場地に経済学部東アジア研究科・経済学研究科棟の新営が計画されたことを受け、埋蔵文化財資料館専門委員会にて予備発掘調査を実施し、計画地下の様相を確認することが決定された(平成20年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年1月26日開催)。調査対象地は校舎建設予定地となる東西22.5m、南北14m範囲である。

調査対象地の北隣接地においては、昭和55年(1980)に経済学部E棟(講義棟)新営に伴う試掘調査^{註1}が、東隣接地においては平成6年(1996)に商品資料館新営に伴う試掘調査^{註2}が、平成13年(2003)には経済学部校舎改修(プレハブ校舎新営)に伴う試掘調査^{註3}がそれぞれ実施されている。これらは範囲を限定してのトレンチ調査であったが、いずれも表土・造成土下に旧耕土・旧床土、その下位に河川堆積土を検出している。一部河川堆積土から縄文土器小片が出土しているが、顕著な埋蔵文化財は確認されていない状況である。

当開発予定地においても同様の成果が予想されたが、予定地の北西方約70mには弥生時代の集落址が確認された「遺跡保存公園」調査地が存在しており、集落造営に適した安定的微高地が検出される可能性も排除できなかった。よって、開発予定地の南縁から西縁にかけて、幅2mでL字形に予備発掘調査区を設け、調査を実施する運びとなった。

【註】

1) 河村吉行(1992)「吉田構内経済学部校舎新営に伴う試掘調査」

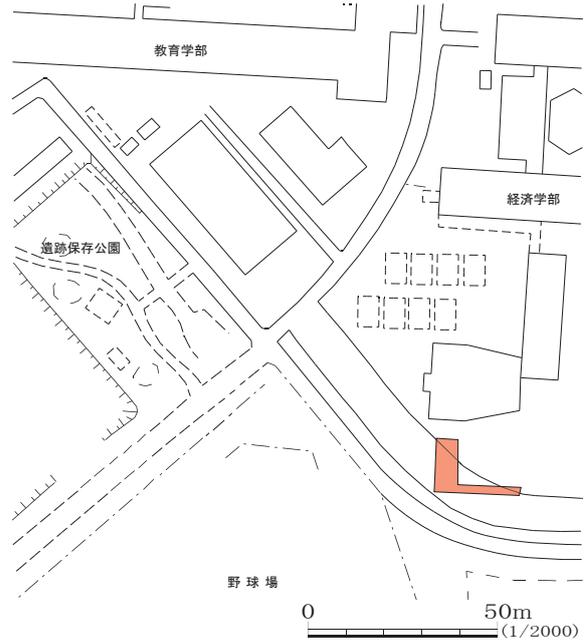


図4 調査区位置図



写真7 調査区周辺遠景(南上空から)



写真8 調査前全景(南西から)

査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口

2) 豆谷和之(2000)「経済学部商品資料館新営工事に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XIV』,山口

3) 調査報告書未刊行

(2) 調査の経過

調査は平成21年4月13日より着手した。L字形トレンチの東西トレンチ東端部より西方に重機掘削を進めたところ、想定通り旧耕土・旧床土下に河川堆積土が検出された。河川堆積土上面を追ってさらに西方に掘削を続けたところ、調査区西端部(L字形トレンチコーナー)から東4.8m地点より地山と目される明黄色粘土が確認された。この粘土層は開発予定地西縁部に設けた南北トレンチ全面に広がっており、その上面には部分的に遺構が存在することも判明した。

この結果から、開発予定地は遺跡保存公園弥生集落址が形成された微高地の東縁辺部に当たることが予想された。幅2mで設定したトレンチ調査では、この微高地が東方にどの程度存在するのかが不明確であったため、①予備発掘調査後の本発掘調査の実施、②予備発掘調査範囲の拡大の両者を視野に埋蔵文化財資料館と開発部局である施設環境部との調整が行われた。その結果、本体工事着手までの期日と発掘調査費用の軽減を鑑み、開発予定地西縁部に設けた南北トレンチを東に4m拡張し、地山と目される明黄色粘土層の範囲を確認することとなった。

その後、季節外れの台風に見舞われたものの、調査は順調に進行し、着手より2週間後の4月24日に予定通り終了することとなった。

(3) 基本層序(図5、写真11・12・19～22)

東西トレンチ南壁に見る基本層序は①アスファルト(0.05m)、②造成土(0.4～0.6m)、③灰色(10Y4/1)粘質土に5mmφの礫が極少量混ざる…旧耕土(0.05～0.2m)、④灰オリーブ色(5Y6/2)質度に5mmφ以下の礫が極少量混ざる…旧床土(0.2～0.4m)、④河川堆積土もしくはにぶい黄色(2.5Y6/3)粘土…地山、である。④層として、河川堆積底面の地山として他に明緑灰色(5G7/1)砂質土、明緑灰色(5G7/1)シルトも見られる。

南北トレンチにおいては、部分的に③の旧耕土が削平されている状況が見られたが、それ以外の堆積状況に差はなく、開発予定地全域において基本層序は統一的なものであることが予想される。

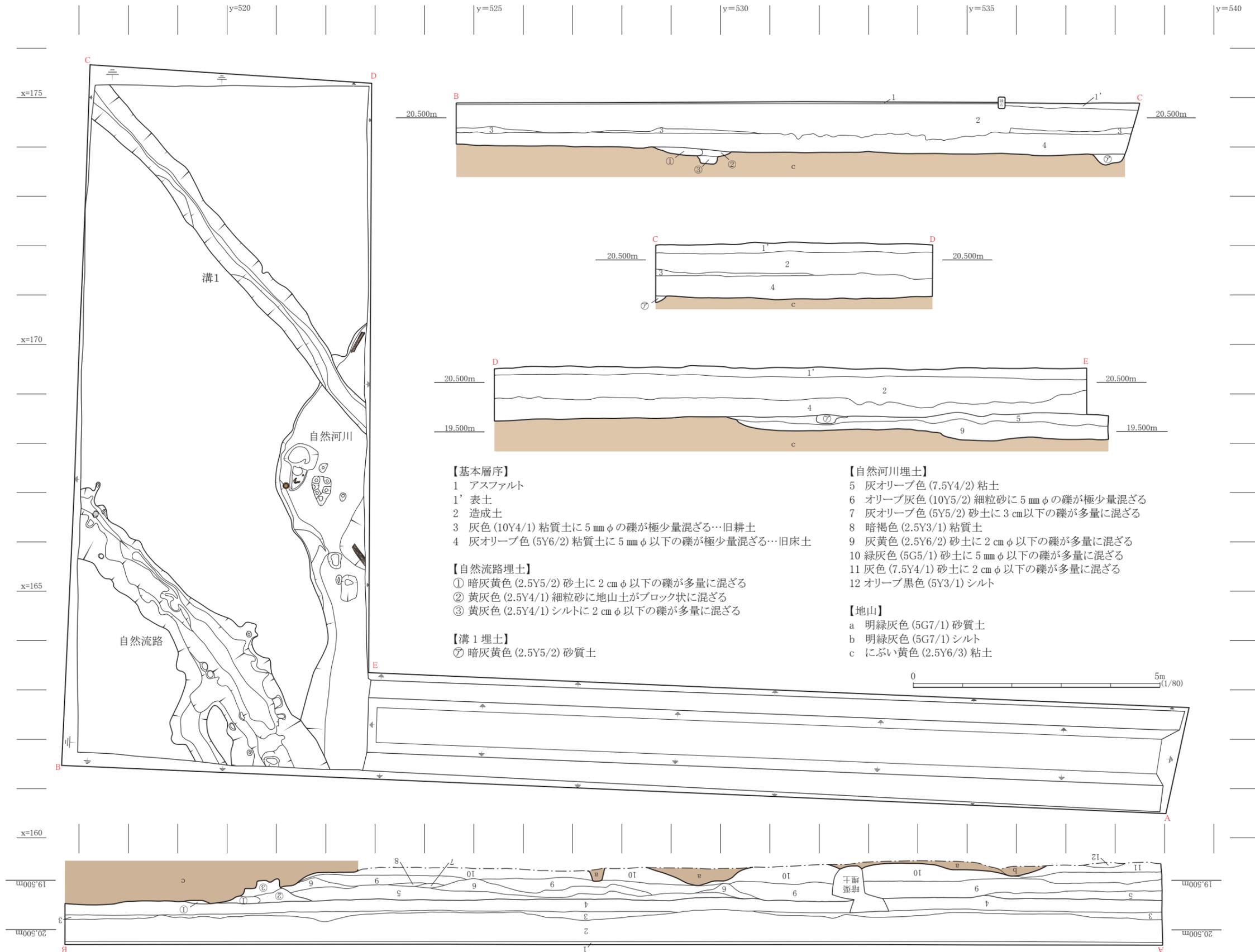
(4) 遺構

自然河川、自然流路、溝が確認された。

自然河川(図5、写真9・10・12～14・19～22)

従来より経済学部敷地においては過去において自然河川が集中することが指摘されてきたが、その西限部を確認することができた。河川は、その底面の傾斜によって走向を確定することはできないが、周辺地形および現況地形、既往の調査成果等により、南から北に走るものと思われる。河川幅は東西トレンチ南壁で18.9mを測るものの、土層断面や地山の遺存状況を見るにこれは一時の河川幅ではなく、河道の変化や氾濫を繰り返した結果と見られるが、今回は厳密な精査を実施していない。河川の深度は最深部で0.75m以上となる。

河川堆積土の掘削は東西トレンチ部は全て重機により行い、人力掘削は南北トレンチのみで行った。



【基本層序】

- 1 アスファルト
- 1' 表土
- 2 造成土
- 3 灰色(10Y4/1)粘質土に5mmφの礫が極少量混ざる…旧耕土
- 4 灰オリーブ色(5Y6/2)粘質土に5mmφ以下の礫が極少量混ざる…旧床土

【自然流路埋土】

- ① 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂土に2cmφ以下の礫が多量に混ざる
- ② 黄灰色(2.5Y4/1)細粒砂に地山土がブロック状に混ざる
- ③ 黄灰色(2.5Y4/1)シルトに2cmφ以下の礫が多量に混ざる

【溝1埋土】

- ㊦ 暗灰黄色(2.5Y5/2)砂質土

【自然河川埋土】

- 5 灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土
- 6 オリーブ灰色(10Y5/2)細粒砂に5mmφの礫が極少量混ざる
- 7 灰オリーブ色(5Y5/2)砂土に3cm以下の礫が多量に混ざる
- 8 暗褐色(2.5Y3/1)粘質土
- 9 灰黄色(2.5Y6/2)砂土に2cmφ以下の礫が多量に混ざる
- 10 緑灰色(5G5/1)砂土に5mmφ以下の礫が多量に混ざる
- 11 灰色(7.5Y4/1)砂土に2cmφ以下の礫が多量に混ざる
- 12 オリーブ黒色(5Y3/1)シルト

【地山】

- a 明緑灰色(5G7/1)砂質土
- b 明緑灰色(5G7/1)シルト
- c にぶい黄色(2.5Y6/3)粘土

図5 調査区平面図・断面図



写真9 南北トレンチ遺構検出状況(北西から)



写真10 南北トレンチ遺構完掘状況(北から)



写真 11 南北トレンチ北壁土層断面 (南から)



写真 12 南北トレンチ東壁土層断面 (北西から)



写真 13 自然河川埋土内土器出土状況 (東から)



写真 14 自然河川埋土内木製品出土状況 (北から)



写真 15 自然流路完掘状況 (北西から)



写真 16 自然流路埋土内土器出土状況 (南東から)



写真 17 自然流路埋土断面 (東から)



写真 18 溝1完掘状況 (北西から)



写真 19 東西トレンチ掘削状況 (西から)



写真 20 東西トレンチ完掘状況 (西から)



写真 21 東西トレンチ南壁土層断面 (北西から)



写真 22 東西トレンチ南壁土層断面 (北東から)

そのため、遺物は全て南北トレンチに検出された河川埋土からの出土となることを断った上で河川の埋没時期を推察すると、河川堆積であるため検出した上層(灰オリーブ色(7.5Y4/2)粘土)・下層(オリーブ灰色(10Y5/2)細粒砂に5mmφの礫が極少量混ざる)には時期の異なる資料の混在が見られ、明確な時期差を見出すことは困難であるものの(図6)、河川としては弥生時代終末期、少なくとも古墳時代前期までに埋没を終えたものと思われる。また、河川埋土内からは用途不明品であるが木材2点が出土している(図7、写真14)。

自然流路(図5、写真8・9・15～17)

南北トレンチ南西部にて検出した。形状と堆積土質から自然流路と判断しているが、北東に平行する溝1と走向を等しくしていることは注意が必要であろう。

南壁断面図と西壁断面図を見ると流路は北西から南東に走っているかに思えるが、全体的な底面の傾斜は南東―北西方向の流路であったことを示している。南東部で2筋に分岐していた流路は北西に向かい合流し1筋となっている。流路幅は南東端部で約1.6m、北西端部で約1m、深さは最深部で約0.45mを測る。流路埋土は南東部で明確に自然河川埋土を切り込んでおり、自然河川埋没後に形成されたことが分かる。

流路埋土は大きく①上層…暗灰黄色(2.5Y5/2)砂土に2cmφ以下の礫が多量に混ざる、②中層…黄灰色(2.5Y4/2)細粒砂に地山土がブロック状に混ざる、③下層…黄灰色(2.5Y4/2)シルトに2cmφ以下の礫が多量に混ざる、に分層される。下層の上に中層が堆積するが、上層は中層を挟み込むように堆積しており、強い水流があったことを窺わせている。

遺物は上～下層すべてに包含されている(図8)。最下層出土遺物から、この流路の形成時期を6世紀後半から7世紀前半と見なしておきたい。

溝1(図5、写真8・9・18)

南北トレンチ北部にて検出した。埋積土はかつて水流があったことを窺わせるが、断面形態および不自然に直線的であることから、人工物と判断した。上記の自然流路同様北西―南東方向に延びるが、底面は南東―北西に降下していることから、水流の方向も自然流路と同様であったことが分かる。幅は約0.4m～0.7m、深さは最深部で0.2mを測る。

なお、南北トレンチで検出した地山面には人または家畜の足跡と見られる凹みが多数検出された。土地の耕作に伴うものであろうが、その方向は溝1と同一であるように思われた。溝1の南西に平行して検出された幅約0.5～1mの灰オリーブ色粘質土は、旧耕土との分層が不可能であったため、これも人または家畜の通路となっていた凹みに旧床土が埋積したものと判断している(写真9)。

(4) 遺物(図6～9、写真23～27)

当調査において出土した遺物は、自然河川埋土出土、自然流路埋土出土、南北トレンチ遺構面(地山)直上(旧床土最下面)出土資料に大別される。土器の大半は小片であったが、できうる限りの図化作業を行った。以下に報告を行う。

自然河川埋土(図6・7、写真23・24)

前述したが、遺物は南北トレンチにて検出した埋土にのみ確認した。埋土は上層、下層に分層され、両層とも遺物を包含している。

1～3は上層出土土器。1は縄文土器深鉢口縁部片。尖り気味の口縁下に刻目突帯を巡らす。全面風化が著しく、器面調整の観察は困難であるが、内面の極一部に横ハケ状の痕跡が見られる。2は弥生

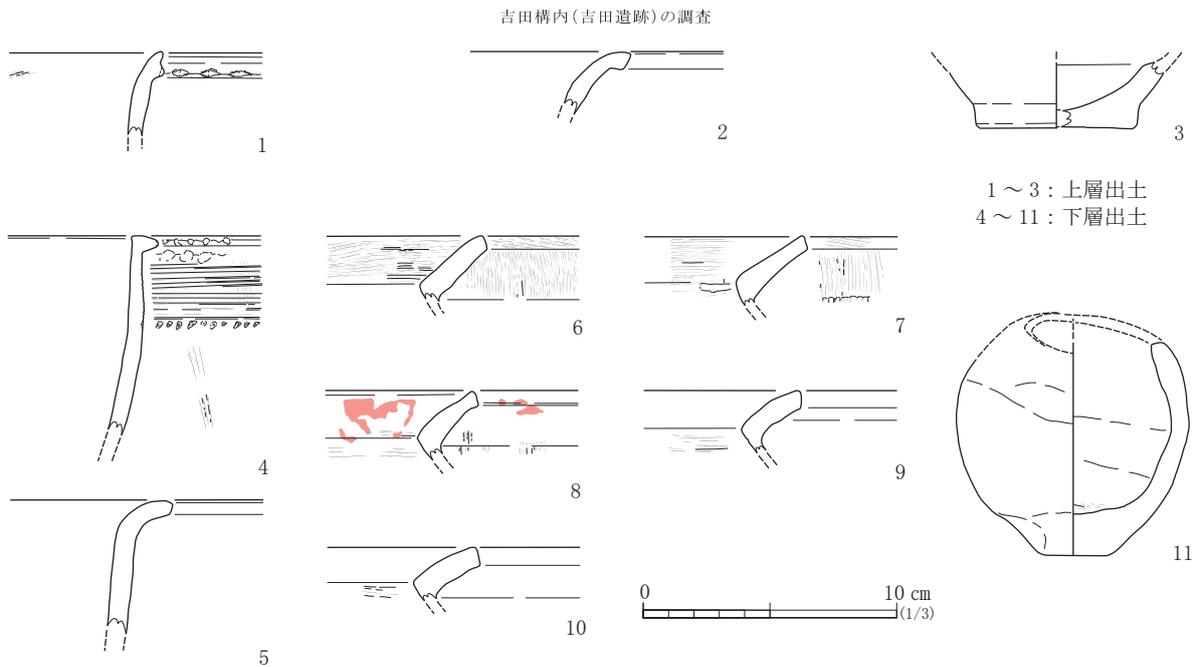


図6 自然河川埋土出土土器実測図

土器鉢類の口縁部か。口縁を緩やかに外反させ、端部は横ナデにより面とりを行っている。下端部は断面三角形状に肥厚させている。3は弥生土器底部片。平底の底部から開き気味に体部に立ち上がる。底径6.0cm、残高2.6cmを測る。内外面ともナデ調整のみ観察される。

4～11は下層出土土器。4は弥生土器甕口縁一体部片。小片のため反転復元不能である。胴部は膨らまず砲弾状の器形となる個体であり、口縁上端は横ナデにより面が形成され、ほぼ直角に折り曲げた口縁外端部に不明瞭ながら刻みを施しているようである。口縁下の外面には6条単位の櫛描き沈線を上下に2条施しており、その直下に左下-右上方向の刺突文を横方向に連続して施している。全面風化が著しいが、外面には部分的に縦ハケが残る。内面は剥離が激しく調整は観察できない。5も弥生土器甕口縁一体部片。小片のため反転復元不能。直線的に立ち上がる胴部から口縁は緩やかに外反する。口縁端部はナデにより面を取るようである。内外面とも風化が激しく調整痕は残らない。6～11は壺甕類の口縁部小片で、いずれも反転復元不能である。6はくの字に強く屈曲する口縁部片で、外面に縦ハケ、内面に横ハケが明瞭に残る。端部はハケ調整により面が形成されている。7も同様の特徴を有するが、口縁断面形態が異なるため別個体と判断した。8も同じくの字状に強く屈曲する口縁部片であるが、口縁端部付近の内外面を強く横ナデするため口縁内外端が肥厚するように見える。端部は横ナデにより面を取る。外面には縦ハケ、内面には横ハケが施されており、内外面ともに部分的に赤色塗彩が残る。9・10も同様にくの字状に強く屈曲する口縁部片であるが、器壁が厚く口縁も短い。内外面を横ナデし、端部もナデにより面取りする。11は出土土器類中唯一完形に復元可能な小型鉢である。自然河川西肩部より出土している(図5、写真13)。口縁から底部までが遺存しているが、口縁の大部分を欠失する(写真24の11a,b)。小ぶりながら平底の底部から、内湾気味に体部に立ち上がる。胴は球形に膨らむがゆがみが大きく、口縁も大きく傾くようである。器壁の厚みも安定せず、体部低位に比して口縁付近が厚くなる。部分的にしか遺存していないが口縁端部は面を取るようである。内外面ともわずかに指押さえ痕が見られる他、器面調整痕は観察されない。復元口径は5.0～5.8cm、胴部最大径9.2cm、底径2.4cm、残高8.45cmを測る。

この他、図示不能な土器小片が数十点存在するが、大半は弥生土器壺甕類の破片と見られる。

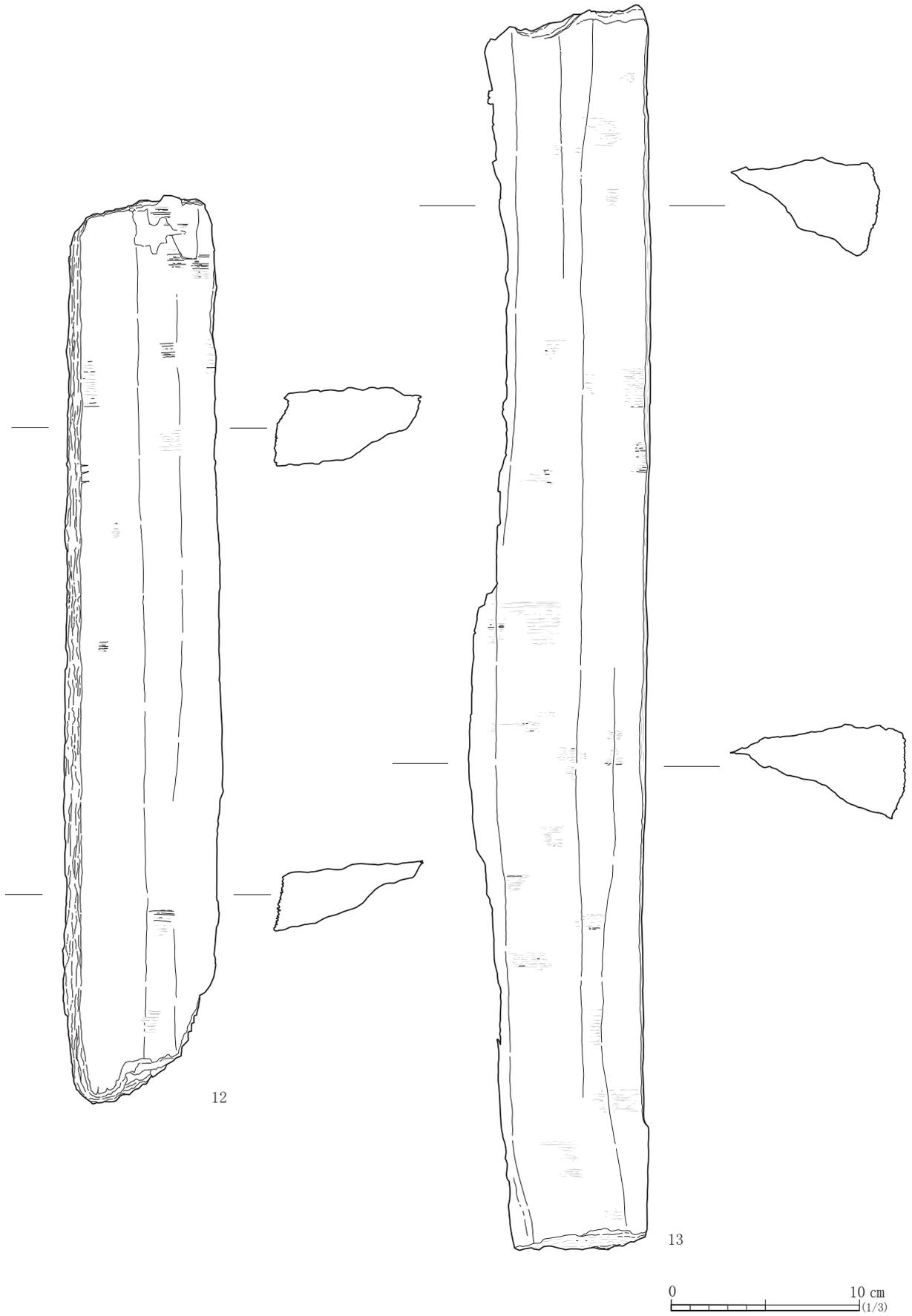


図7 自然河川埋土出土木製品実測図

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 23 自然河川埋土出土土器①

吉田構内(吉田遺跡)の調査



8a



9a



10a



8b



10b



11a



11b



12



13

写真 24 自然河川埋土出土土器②・木製品

前記の土器類の他、自然河川埋土からは木製品2点が出土している(図7)。いずれも下層出土品である。12は検出した河川の北端部から出土した(図5、写真14)。片平面を斜辺とする断面直角三角形形状の板材である。所々に擦痕が見られる他に明確な加工痕は観察できない。残長48.7cm、最大幅12.5cm、最大厚4.0cmを測る。13はその南方約4.4m地点から出土している(図5)。片端部が調査区東壁に差し込まれた状態で出土したが、調査終了時に引き抜きを行った。12と同様の形態、特徴を有する資料であるが、両者は接合しない。残長65.8cm、最大幅9.45cm、最大厚5.2cmを測る。

自然流路埋土(図8、写真25・26)

埋土は上層、中層、下層に分層され、いずれの層からも土器が出土している。

14～19は上層出土土器。14は弥生土器鉢口縁部片か。口縁を屈曲気味にやや強く外反させる。口縁端部は丸く収める。内外面とも横ナデが施されている。15は弥生土器壺底部片。厚みのある平底の底部片であり、体部との接合部分で折損している。体部下端外面には縦方向のヘラミガキが施されている。復元底径8.3を測る。16も弥生土器底部片と見られる。15に比して器壁が薄い。風化が激しく内外面とも調整の観察は不能である。17は土師器甕の口縁部片。全面風化が激しく器面調整が不明であるが、端部は面を取っているようである。18も土師器甕口縁部片。短く外反する口縁部片で、端部は丸く収める。器壁の厚い頸部から口縁にかけて徐々に器壁が薄くなっている。外面は横ハケ後横ナデ、内面は横ナデが施されており、頸部外面には斜線ヘラ記号が部分的に遺存している。19は須恵器坏蓋口縁一天井部片。小片であるが、歪みがないと仮定すると復元口径は14.5cm内外となる。天井部から屈曲して口縁に至る。口縁端部は尖り気味に丸く収める。天井部外面に回転ヘラ削り、口縁内外面に回転ナデ調整が施される。

20・21は中層出土。図化不能資料を含め、上・下層に比して中層の土器包含量は少ない。20は須恵器坏身口縁部片。小片であるため径は復元できない。受け部から口縁にかけての破片であるが、口縁端部を欠失している。21は壺甕類の口縁部片か。胎土は精緻であるものの焼成不良品である。口縁外面を肥厚させているが、粘土の折り曲げか付加によるものか判別できない。

22・23は下層出土。22は須恵器坏蓋であり、口縁の大部分を欠失するものの完形に近く、遺存状態も良好である(写真26の22a,b)。検出された自然流路の北西端部付近において、底面に接する状態で出土している(写真16・17)。丸みを帯びた天井部から内湾して口縁に至り、口縁端部を尖り気味に丸く収める。天井径3.7cm、復元口径12.8、器高4.0cmを測り、口径に比して器高が高く、ドーム状の器形を呈する。器壁は分厚く、天井部外面1/4に回転ヘラ削り、以下に回転ナデ調整が施されており、内面は天井部にのみ不定方向の直線ナデが、以下は回転ナデ調整が施されている。平面形態はやや歪みがあり、楕円形状となっている。23は土師器甕口縁部片。器壁が分厚く、外面を強く横ナデしながら外反させている。口縁端部は鈍く面を取っている。小片であるが、歪みが少なければ復元口径は17cm内外となる。

この他、自然流路からも数十点の土器小破片が出土しているが、いずれも図化不能資料であり、大部分は弥生土器または土師器の壺甕類体部片である。

遺構面直上(図9、写真27)

重機掘削後、遺構面(地山)精査中に出土した遺物で、所属層は基本層序第4層…灰オリーブ色(5Y 6/2)質度に5mmφ以下の礫が極少量混ざる(旧床土)となる。遺物出土量は少なく、図化可能資料も4点に過ぎない。

24は須恵器坏蓋口縁部片。小片であるため口径復元不能である。天井部から緩やかに内湾しながら降下し、口縁をわずかに外反させる。端部は尖り気味に丸く収めている。風化が著しく、内外面ともほぼ

吉田構内(吉田遺跡)の調査

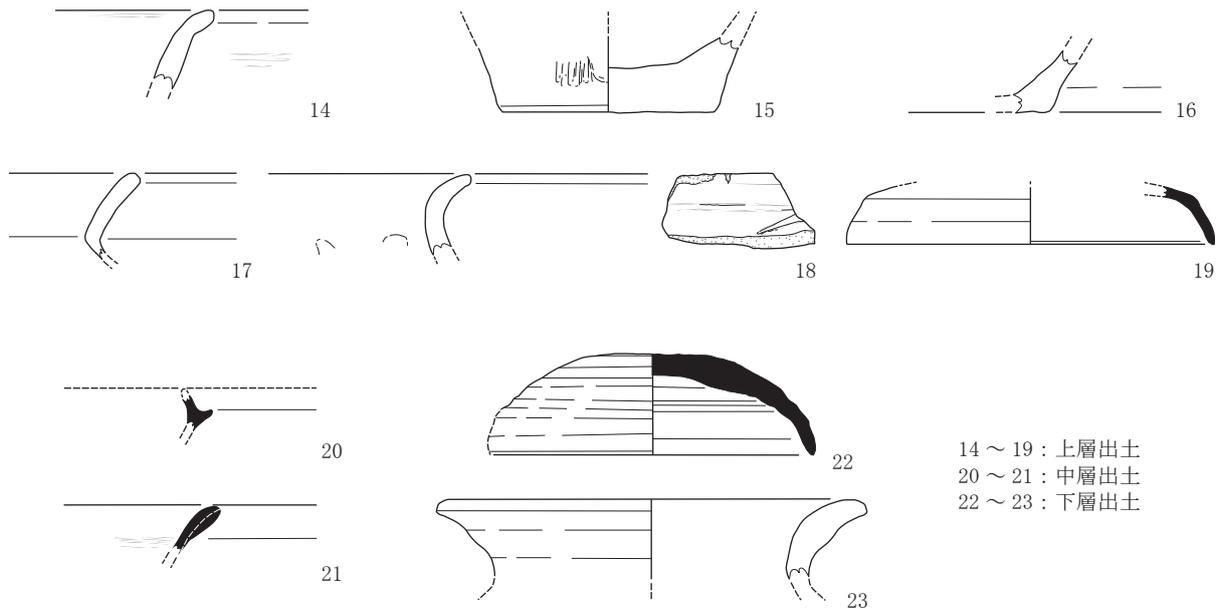


図8 自然流路埋土出土土器実測図

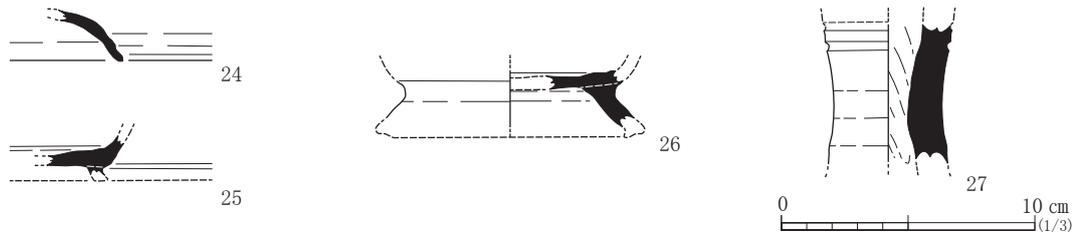


図9 遺構面直上出土土器実測図

原面を留めない。25は須恵器高台付坏底部片。高台端部を欠失する。高台は底部外端のわずかに内側に付き、ハの字状に開くものと思われる。体部は開き気味に直線的に立ち上がる。外面は底部に不定方向の直線ナデ、以外は回転ナデが施される。内面遺存部は全て回転ナデ。26も須恵器高台付坏底部片。当資料も高台端部を欠失するため、高台接合部径で反転復元を行った。底部外端に器壁が厚く、長くハの字状に開く高台が付加されている。端部は欠失するが、突起する内端部で接地するタイプである。高台内外面に回転ナデが施されるが、外面は部分的に縦方向のヘラナデが行われている。内面は底面中央部に不定方向の直線ナデ、外縁部に回転ナデが施されている。27は須恵器長頸壺頸部片。器壁は厚く、最大厚1.4cmを測る。外面には平行する沈線2条が巡る。器面調整は外面に回転ナデが施され、内面にはしぼり痕が残る。

(5)まとめ

この度の調査の最大の成果は、存在が予想されつつもこれまでに確認することができなかった、弥生時代集落(遺跡保存公園)が造営された沖積平地内微高地の南東縁辺部が確認されたことにある。ただし、当地に確認された基本層序から、本学統合移転前には微高地はすでに大きく削平されていたものと推定される。その削平の要因は、中世以降の農地拡大に求められる。統合移転前の調査地周辺の土地利用状況は、南東から北西に延びる丘陵を活用した棚田および区画水田となっており、高地は階段状に削平され、低地は区画を設けることにより水田化が図られている。沖積平地に当たる調査地は、微高地であるが故にその上面を大きく削平されたのであろう。また、集落造営時に南東側に河川を望んでい

吉田構内(吉田遺跡)の調査

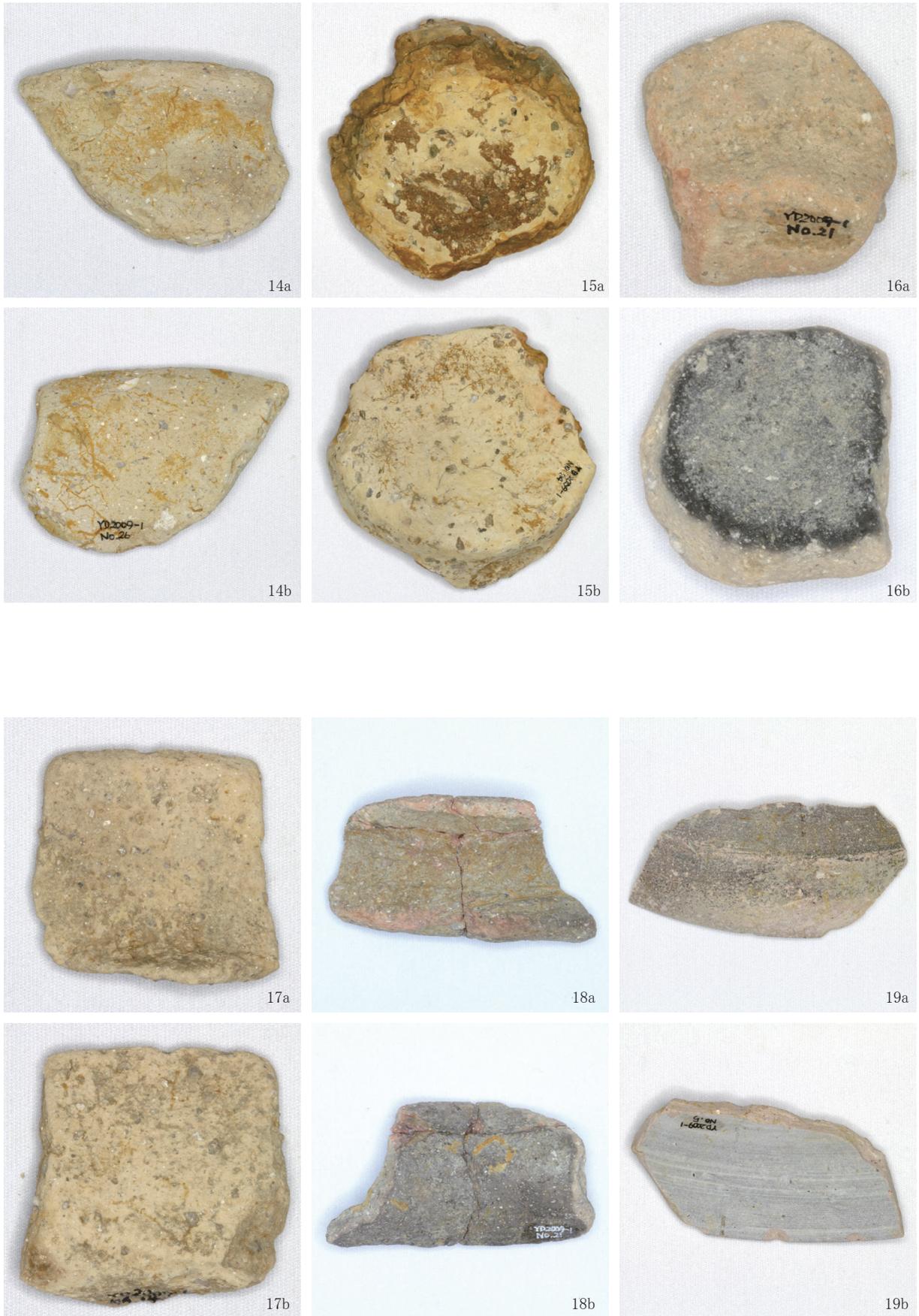


写真 25 自然流路埋土出土土器①

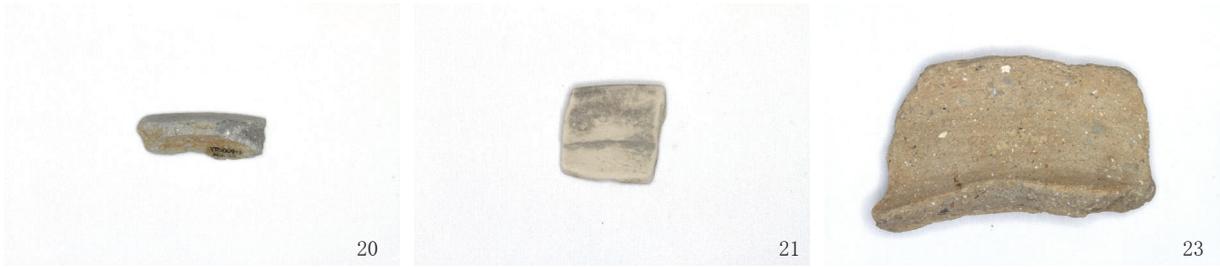


写真 26 自然流路埋土出土土器②



写真 27 遺構面(地山)直上出土土器

表2 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	自然河川 上層	縄文土器 深鉢	口縁部		①黄灰色(2.5Y4/1) ②黒色(2.5Y2/1)		やや粗:0.3~1mmφの砂粒 多く混ざる	刻目突帯を 有する
2	自然河川 上層	弥生土器 鉢か	口縁部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②黒褐色(10YR7/3)		やや粗:0.5~4mmφの砂粒 多く混ざる	
3	自然河川 上層	弥生土器 甕	底部	②(6.0)	①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)		密:0.5~1.5mmφの砂粒多く 混ざる	
4	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁~ 体部		①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)		密:0.3~2mmφの砂粒少量 混ざる	口縁端部刻 目。6条単位 の櫛描文が 2条施される
5	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁~ 体部		①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰白色(10YR8/2)		やや粗:0.5~4mmφの砂粒 多量に混ざる	風化激しい
6	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁部		①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②灰黄色(2.5Y7/2)		密:0.3~1mmφの砂粒極少 量混ざる	
7	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁部		①暗黒色(N3/) ②浅黄色(2.5Y7/3)		密:0.3~0.5mmφの砂粒少量 混ざる	
8	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁部		①灰白色(10YR8/2) ②にぶい黄褐色(10YR7/3) 塗彩:にぶい橙色(5YR6/4)		密:0.2~2mmφの砂粒少量 混ざる	内外面に塗 彩が見られ る
9	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁部		①灰白色(10YR8/2) ②灰黄色(2.5Y7/2)		密:0.5~2mmφの砂粒やや 多く混ざる	
10	自然河川 下層	弥生土器 甕	口縁部		①②にぶい黄褐色 (10YR7/4)		粗:1mm以下の砂粒多く混ざ る	風化激しい
11	自然河川 下層	弥生土器 小型鉢	完形	①(5.0~5.8) ②2.4 ③8.45	①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②橙色(7.5YR7/6)		密:0.3~2mmφの砂粒やや 多く混ざる	ゆがみが大 きい
14	自然流路 上層	弥生土器 鉢か	口縁部		①②灰黄色(2.5Y7/2)		密:0.1~3mmφの砂粒多く混 ざる	
15	自然流路 上層	弥生土器 壺	底部	②(8.3)	①灰白色(2.5Y8/2) ②浅黄色(2.5Y8/3)		粗:1~3mmφの砂粒多く混ざ る	
16	自然流路 上層	弥生土器 甕か	底部		①浅黄褐色(10YR8/3) ②暗灰色(N3/)		密:0.1~2mmφの砂粒少量 混ざる	
17	自然流路 上層	土師器 甕	口縁部		①②浅黄色(2.5Y8/3)		やや粗:0.5~1.5mmφの砂粒 多く混ざる	風化激しい
18	自然流路 上層	土師器 甕	口縁部		①灰黄褐色(10YR6/2) ②灰色(5Y4/1)		密:0.1~0.5mmφの砂粒極少 量混ざる	外面にへら 記号あり
19	自然流路 上層	須恵器 坏蓋	口縁~ 天井部	①(14.5)	①灰色(N6/) ②灰色(N7/)		密:0.1~0.5mmφの砂粒極少 量混ざる	
20	自然流路 中層	須恵器 坏蓋	口縁~ 受け部		①②灰色(N6/)		密:0.1~1.5mmφの砂粒極少 量混ざる	
21	自然流路 中層	須恵器 壺か甕	口縁部		①灰白色(2.5Y8/1) ②黄灰色(2.5Y7/1)		精緻	焼成不良
22	自然流路 下層	須恵器 坏蓋	完形	①12.8 ③4.0	①②灰白色(N7/)		密:0.1~2mmφの砂粒少量 混ざる	ややゆがみ が大きい
23	自然流路 下層	土師器 甕	口縁部	①(17.0)	①②灰黄褐色(10YR6/3)		密:0.1~3mmφの砂粒多く混 ざる	
24	遺構面 直上	須恵器 坏蓋	口縁部		①②灰色(N6/)		密:0.1~1mmφの砂粒やや 多く混ざる	風化激しい
25	遺構面 直上	須恵器 高台付坏	底部		①②灰白色(N7/)		密:0.1~0.5mmφの砂粒極少 量混ざる	高台端部欠 損
26	遺構面 直上	須恵器 高台付坏	底部		①灰白色(N7/) ②灰白色(2.5Y7/1)		密:0.5mmφの砂粒極少量混 ざる	高台端部欠 損
27	遺構面 直上	須恵器 長頸壺	頸部		①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)		精緻	沈線2条巡 る

表3 出土遺物(木製品)観察表

法量()は残存値

遺物 番号	遺構	器種	法量(cm)	備考
12	自然河川 下層	木材	残存長(48.7) 残存最大幅(12.5) 残存最大厚(4.0)	所々に擦痕が見られる
13	自然河川 下層	木材	残存長(65.8) 残存最大幅(9.45) 残存最大厚(5.2)	所々に擦痕が見られる

た弥生人は、その河川の埋没とともに集落を放棄し、より高所の低丘陵上に移住したものと想像される。

微高地上面が大きく削平され、自然流路や溝など深度の深い遺構しか遺存していないために、河川埋没後の土地活用状況は不明確である。想像をたくましくすれば、自然流路埋土および地山直上精査時の出土遺物から、弥生集落放棄後は6世紀後半以降7～9世紀にかけて再び調査区周辺地において人類活動が再開されたものと思われる。しかしながら、既往の調査により周辺地において遺構が確認された事例はなく、該当期の遺構はさらに東-北東方向の丘陵地にのみ確認^{註1}されている。

なお、確認された微高地は北に隣接する経済学部E棟(講義棟)敷地では確認されていないことから、南北トレンチの北で急に西折するものと予想される。これは、遺跡保存公園の北東に隣接しつつ自然河川もしくは流路しか確認^{註2}されていない第1学生食堂敷地と関連し考えなくてはならない問題であろう。微高地の南限域に関しては、野球場、ハンドボール場などが位置するため有力な地下の情報が存在しない状況にある。

今回の新校舎建設により経済学部周辺の空闲地はさらに狭まり、南に運動場施設が隣接することからも、調査地周辺における新規建物等が計画される可能性は極めて低いと思われる。ただし、吉田地区統合移転工事中に発見され、吉田遺跡を象徴し、現在まで保存されている弥生時代集落を取り巻く古環境には未だ不明部分が多く残される。周辺地においては、設備工事等小規模工事に際しても、地下の様相を確認するために丁寧な埋蔵文化財保護対応を行うことが望まれる。

【註】

- 1) a: 河村吉行ほか(1985)「吉田構内大学会館新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口
 - b: 田畑直彦(2002)「平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
 - c: 田畑直彦(2002)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
 - d: 横山成己(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成18年度-』,山口
 - e: 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成20年度-』,山口
- 2) 山口大学吉田遺跡調査団(1976)小野忠熙(編)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』,小野忠熙(編),山口

2. 野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査

調査地区 吉田構内H-23区、I-24区、K-24区

調査面積 40㎡

調査期間 平成21年7月8日～28日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯(図10、写真28・29)

吉田構内南西部に位置する野球場において、外野ホームランゾーン外周に防球ネットを設置する工事計画が立案された。開発予定地周辺は調査歴が少なく、わずかに昭和42年(1967)に本学小野忠熙氏により実施された吉田遺跡第Ⅲ地区東南区調査^{註1}と、山口市教育委員会と埋蔵文化財資料館の合同により実施された市道神郷1号線および問田神郷線の送水管理設に伴う立会調査^{註2}があるに過ぎない。

前者に関しては調査記録が曖昧であり、本学吉田地区統合移転完了後に刊行された発掘調査概報に「第Ⅲ地区東南区 野球場予定地の南東縁付近に弥生土器が出土したことから、仮設排水溝とその周辺部の試掘調査を行った。その結果、溝の底より約10cm深いところに弥生前期の生活面があることがわかった。また、それより約50cmばかり高いところに、黒色シルトが充填した弥生中期の縦穴住居跡が埋存していることを明らかにすることができた。」という報告文と出土遺物が残るのみである。また後者についても工事中の立会調査ということで土層断面の部分的な柱状図しか報告されておらず、球場南西部に弥生時代の遺物包含層が堆積しており、その下位に弥生時代の遺構が存在する可能性が高いことが指摘されているに過ぎない。

工事計画は、既設の外野フェンスに沿って新規の支柱を19本埋設するというものであるが、ボーリング掘削工事中の立会調査では地下の状況を把握することが困難であること、また工事予定地に弥生時代の集落跡が存在する可能性が高いことなどから総合的に判断し、地下の状況を把握すべく予備発掘調査を実施することが提案され、了承された(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員

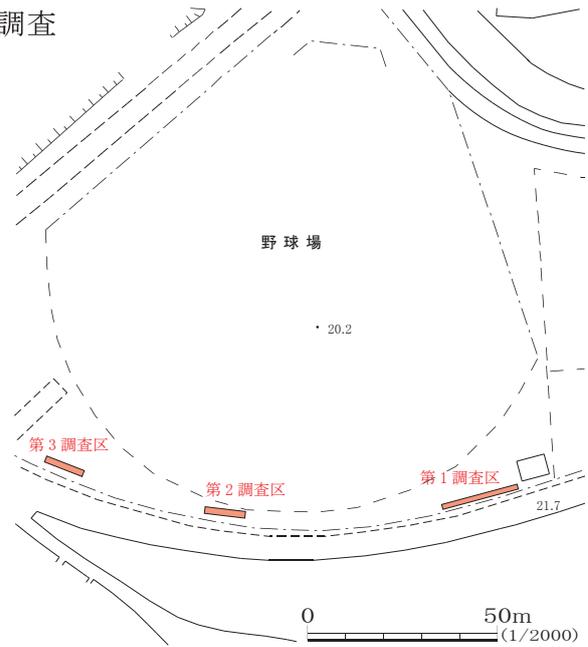


図10 調査区位置図



写真28 調査区周辺遠景(南上空から)



写真29 調査前全景(西から)

会：平成21年3月18日開催)。

【註】

- 1) 山口大学吉田遺跡調査団(1976)『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』,小野忠熙(編),山口
- 2) a: 河村吉行(1987)「市道神郷1号線および問田神郷線の送水管理設に伴う立会委調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報VI』,山口
- b: 縄田潔(1991)「吉田遺跡」,縄田潔(編)『吉田遺跡・障子岳南(山水園)遺跡』(山口市埋蔵文化財調査報告第40集),山口

(2) 調査の経緯(図11)

調査区の設定に関しては、開発予定地に調査区を設定すると後に支柱の安定性が保持できないとの指摘から、開発予定地から野球場方向に2.5m移動した地点3ヶ所に調査区を設定した。諸々の事情から、調査区規模は東から第1調査区(1m×20m)、第2調査区(1m×10m)、第3調査区(1m×10m)となっている。調査経過は以下の通りである。

7月8日(水)…3調査区の重機掘削

7月9日(木)・13日(月)・14日(火)…第3調査区 包含層掘削、遺構面・断面精査、諸記録作成

7月15日(水)・16日(木)・22日(水)…第2調査区 包含層掘削、遺構面・断面精査、諸記録作成

7月23日(木)・24日(金)・27日(月)…第1調査区 遺構面・断面精査、諸記録作成

7月28日(火)…3調査区の埋め戻し

調査は予定通り実働11日で終了したが、元来が梅雨時期であり、さらに7月21日に山口県を襲った豪雨災害を受け、第2調査区調査実施中に長期間発掘現場を封鎖することとなった。

(3) 基本層序

第1調査区(図12、写真32・33)

第1調査区の基本層序は①表土および造成土(層厚0.7~1.0m)、②地山、である。

造成土直下が地山であり、地山面は微弱な高低差を有するが標高20.7m内外でほぼ水平である。本学吉田地区移転時の造成工事により旧耕土・旧床土・旧堆積層・地山が削平されたものと推定される。よって地山上面が遺構検出面となっている。

第2調査区(図12、写真35・36)

第2調査区の基本層序は①表土(層厚0.4~0.6m)、②造成土(層厚0.04~0.22m)、③黄褐色(2.5Y5/6)砂質土…旧床土(層厚0.07m)、④黒褐色(2.5Y3/1)粘質土…遺物包含層(層厚0.05~0.09m)、⑤暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質土…遺物包含層(層厚0.22m)、⑤地山、である。

この調査区においても地山上面が遺構検出面となっており、調査区東端部で地山検出面は標高20.5mを測るが、西に向かい徐々に降下し、調査区西端部では標高20.2mが検出面となる。この地山降下部に上下2層の遺物包含層が形成されている。調査区東端部は造成土直下地山となっていることから第1調査区と同様の削平が行われたものと見られるが、旧床土の遺存状態から見て、当地が耕地化した際にも旧地形は一定の削平を受けているものと推察される。

第3調査区(図12、写真40・41)

第3調査区の基本層序は①表土(層厚0.2~0.4m)、②造成土(層厚0.18~0.33m)、③にぶい黄褐色(10YR5/4)砂質土…旧耕土(層厚0.04m)、④褐色(10YR4/4)砂質土…旧床土(層厚0.07~0.17m)、⑤黄褐色(2.5Y5/4)砂質土…旧耕土(層厚0.04~0.08m)、⑥黄褐色(2.5Y5/6)砂質土…旧床土(層厚0.

吉田構内(吉田遺跡)の調査

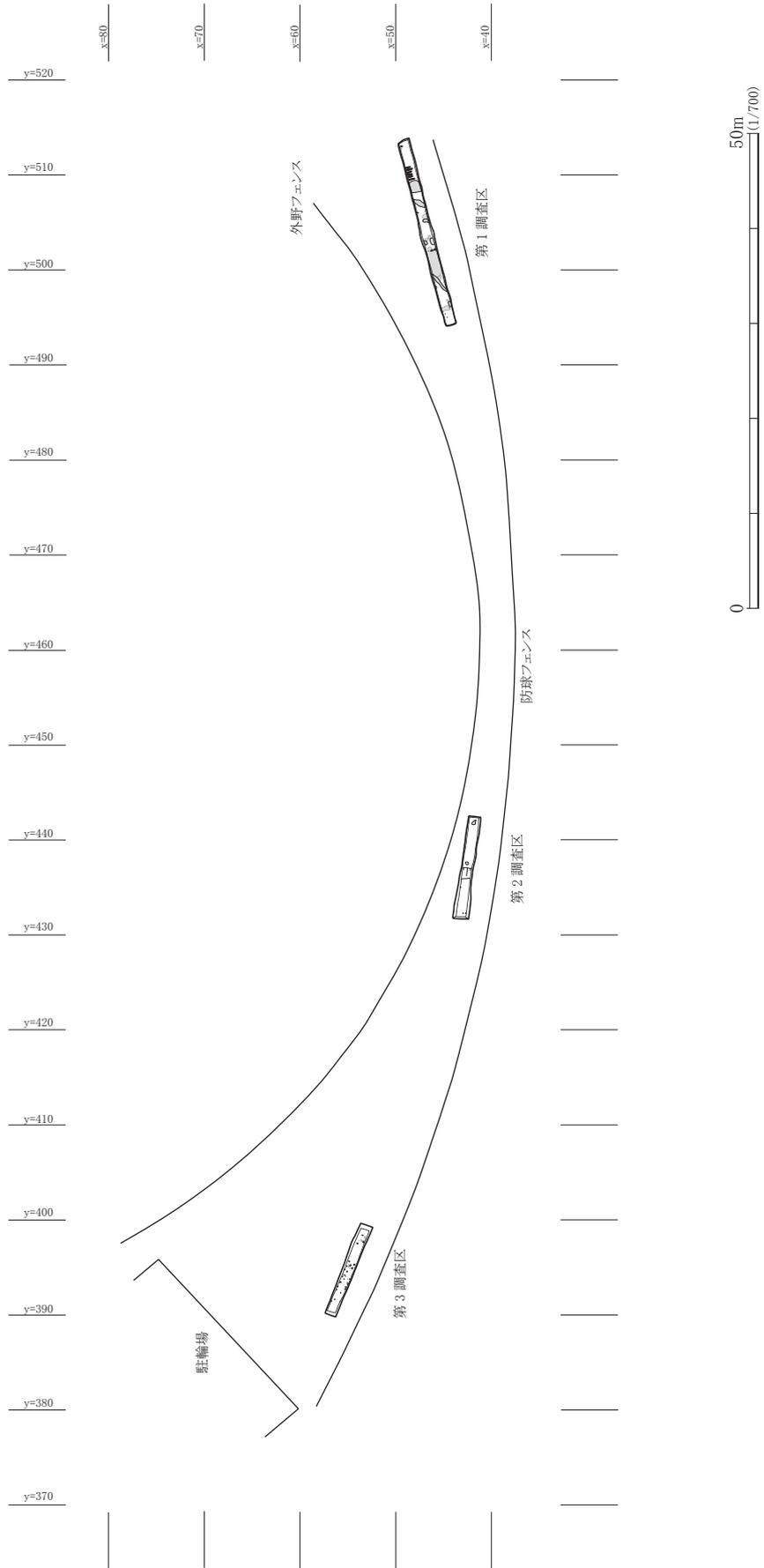


図 11 調査区位置詳細図

04～0.1m)、⑦黒褐色(2.5Y3/1)粘質土…遺物包含層(層厚0.12～0.22m)、⑧暗灰黄色(2.5Y4/2)粘質土…遺物包含層(層厚0.02～0.08m)、⑨暗オリーブ褐色(2.5Y3/3)砂質土…遺物包含層(層厚0.09～0.27m)、オリーブ褐色(2.5Y4/6)砂質土…地山、である。

第1・2調査区同様、地山上面が遺構面となっているが、地山は調査区東端部においては標高20.02mで検出され、西に向かって緩やかに降下し、西方約6m地点で最深部となり、標高19.66mを測る。その後西方に再び上昇し、調査区西端部では標高19.84mで検出される。包含層は調査区全域に堆積しているが、第2調査区にて確認された2層の遺物包含層間に、調査区東端から1.6m地点より土質の異なる薄い遺物包含層が形成されている。

この他、調査区西端部において表土下に地山上面にまで達する攪乱坑を確認した。配管埋設に伴う掘削とも見られず、掘削底面が不自然に地山上面に一致することから、「仮設排水溝とその周辺部の試掘調査を行った」と報告される昭和42年(1967)の試掘トレンチと想像される。

(4) 遺構

今回実施した予備発掘調査では、開発域における地下の状況を確認することを主目的としたものの、開発部局との調整により工事計画地からやや外れた地に調査区を設定したため、埋蔵文化財保護の観点から遺構の掘削は行っていない。

第1調査区(図12、写真31・32)

調査区全域において多数の遺構を確認した。前述したように、第1調査区は造成土直下が地山であるため、地山上面が遺構面となる。検出した遺構には、溝状遺構、ピット、土壌状遺構、流路、杭列、鋤溝状遺構など多岐にわたる。遺構埋土の土質による識別に努めたが、第1調査区の調査実施期間中小雨にたたられたため、土質の記録には至っていない。

第2調査区(図12、写真34・36)

第2調査区では、地山は東から西に降下するが、調査区東部域において検出したピット2基は上部を遺物包含層に覆われていない状況であったため、遺構の時期が保証されていない。調査区東端部において検出したピットは平面二等辺三角形状を呈しており、長軸幅0.56m、短軸幅0.34mを測る。その西方約4m地点にて検出したピットは楕円形状を呈し、長軸幅0.34m、短軸幅0.3mを測る。また、調査区西側においては、包含層下に3基の杭跡と見られる小穴を検出している。

第3調査区(図12、写真39)

第3調査区は全面にわたり遺物包含層が堆積しており、遺構検出面である地山上面の時期を保証している。しかしながら、検出された遺構はいずれも杭列または足跡、植物腐食痕と見られる小規模なものであった。吉田遺跡において未だ確認されていない弥生時代の農耕地であった可能性を残すが、根拠に乏しい。周辺域における今後の調査が期待される。

(5) 遺物(図13・14、写真42～44、表4・5)

この度の調査では遺構掘削を実施していないため、出土した遺物は全て遺物包含層掘削中および断面精査中に検出したものである。

内業整理作業において、第3調査区の基本層序を基準に遺物包含層を3層に分け、出土遺物の所属層の分別に努めたが、第2調査区は降雨による堆積層の泥化があったため、厳密に所属層を分別することは困難と判断し、地山直上出土資料のみ「遺物包含層3」出土とした。第3調査区に関しては、薄く堆

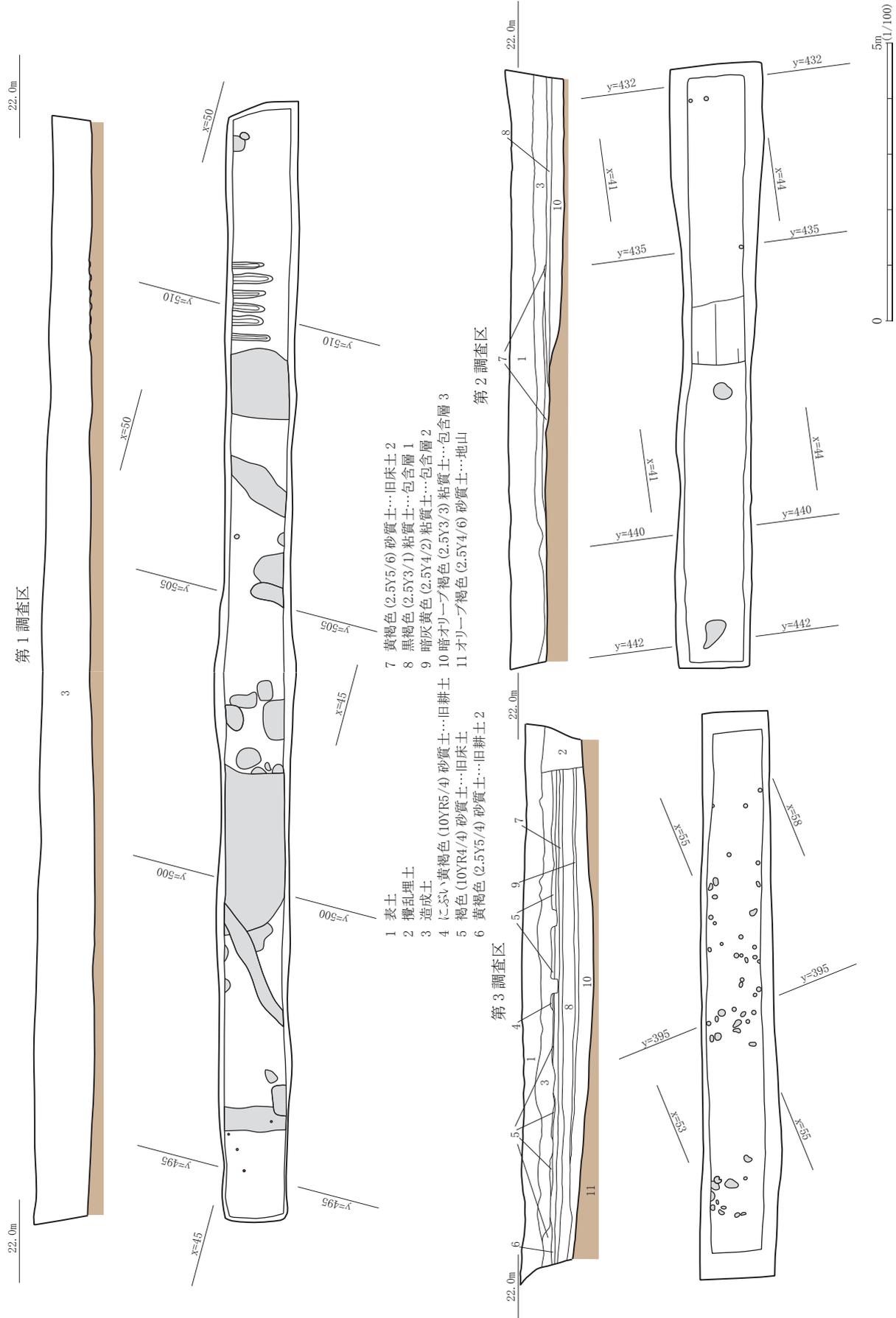


図12 調査区平面図・断面図



写真 30 第1調査区遺構検出状況 (西南西から)



写真 31 第1調査区遺構検出状況 (東北東から)



写真 32 第1調査区南壁土層断面 (北西から)



写真 33 第1調査区南壁土層断面 (北東から)



写真 34 第2調査区遺構検出状況 (西から)



写真 35 第2調査区西部南壁土層断面 (北西から)



写真 36 第2調査区東部南壁土層断面 (北東から)



写真 37 第3調査区重機掘削風景 (西北西から)



写真 38 第3調査区遺物包含層掘削状況 (北西から)



写真 39 第3調査区遺構面検出状況 (西北西から)



写真 40 第3調査区西部南壁土層断面 (北西から)



写真 41 第3調査区東部南壁土層断面 (北西から)

積した遺物包含層2と下位に堆積する遺物包含層3との遺物取り上げ状況に確信が持てなかったため、両者を「遺物包含層3」出土として報告することにする。

第1調査区

遺物包含層が遺存しない調査区であり、図化可能資料は断面精査時に造成土中から出土した土器1点である。1は瓦質土器焙烙把手～体部片。炭素吸着が甘くほぼ土師質焼成となっている。

第2調査区

第3調査区に比して遺物包含層中の遺物包含量は少ない。確実に遺物包含層3から出土した資料中、図化可能資料は1点のみである。2は縄文土器浅鉢口縁部片。内外面とも横方向に丁寧に磨かれており、摩滅の少ない資料である。

3～10は遺物包含層1出土弥生土器。3は甕口縁部小片。鈍く外反させた口縁の端部に刻目を施す。4は外反する口縁部片で、内面に横方向のヘラミガキを施す。口縁端部は凹線状に窪んでいる。壺口縁か。5も外反口縁。器壁の薄い個体であり、内外面とも斜め方向にハケを施すが、外面は横ナデを加えている。口縁端部に面を取る。6は壺体部小片。外面に二枚貝による文様が施されているが、やや弧を描いていることから重弧文または木葉文の可能性はある。7は壺頸部片。2条の突帯を巡らし、端部に刻目を施している。8も壺頸部片か。現状で6条の櫛描き沈線が観察される。内面は完全に剥離している。9は甕底部片。平底と見られ、器壁の厚い底部からほぼ直線的に体部に立ち上がる。風化が激しく、内外面とも摩滅している。10は壺底部片か。小片であるが、底部はわずかに上げ底状を呈し、緩やかに湾曲しながら外開きに体部に移行する。内外面とも風化が激しく、器面調整不明。

第3調査区

11～22は包含層1出土弥生土器。11は甕。遺物包含層出土土器の中で、破片がある程度まとまりをもって出土した唯一の資料である(写真38)。底部は欠失しているが、体部下位から口縁にかけて反転復元可能な資料である。卵形の体部から口縁を強く外反させる器形であり、口縁端部は面と取る。体部外面は上半部に左上～右下方向のハケ、下半部に下～上方向のハケを施している。口縁部及び体部内面は著しく風化しているため調整痕が残っていない。復元口径18.5cm、胴部復元最大径23.4cmを測る。12も甕口縁～体部片。膨らみの少ない胴部から、口縁を直線的に強く外反させている。体部外面に縦ハケ、内面にはケズリが施される。口縁は内外面とも丁寧な横ナデが行われており、口縁端部もナデにより面を取っている。13～15は甕口縁部片。13は内外面とも横ナデが施されているが、外面には部分的にハケ工具端部が当てられた痕跡を残す。14は端部を丸く収める口縁部片。風化が激しく器面が荒れている。15も外反口縁であるが、器壁が薄い個体である。全面摩滅しており器面調整は不明である。口縁端部は鈍く面を取っているように思われる。16は鉢の口縁部か。直線的に開く体部から口縁をわずかに外反させている。口縁端部は鈍く面を取る。内外面に部分的に縦ハケが見られるが、ナデ消しているようである。17～19は壺体部。17は厚い器壁の外面に現状で5条のヘラ描き沈線が残る。沈線下にはわずかに刺突文が見られる。18は外面に二枚貝による文様が施された体部片である。小片ではあるが、3条の横位平行沈線下に縦位の沈線2条で文様区画を設け、各々の区画に3条の斜め沈線が施されている。19も壺体部片と見られるが、縦横断面ともにほぼ弧を描かない。大型品であろうか。内外面とも丁寧にミガキが施されており、外面には赤色塗彩が残る。20は高坏坏～口縁境界部片。坏底と口縁端部を欠失する。21は甕底部片。平底と見られ、内外面ともに風化が激しいが、外面にわずかに縦ハケが残る。復元底部径6.6cmを測る。22は完形復元可能な鉢。小さな平底から内湾して体部に立ち上がり口縁に至る。口縁端部は丸く収める。外面調整は縦ハケ、内面調整は横ハケ。復元口径10.9cm、復元底部径2.4cm、

吉田構内(吉田遺跡)の調査

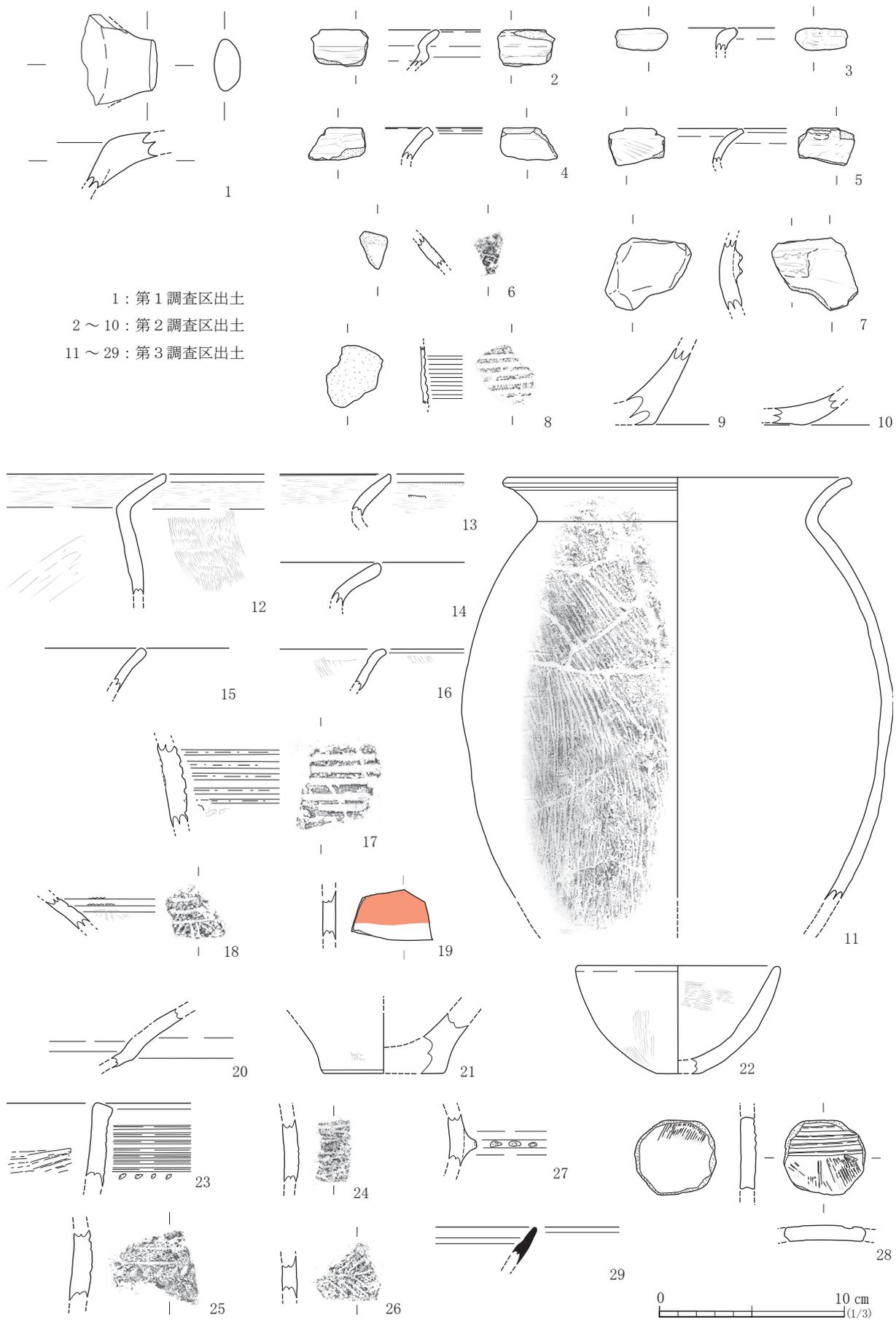


图 13 出土土器実測図

吉田構内(吉田遺跡)の調査

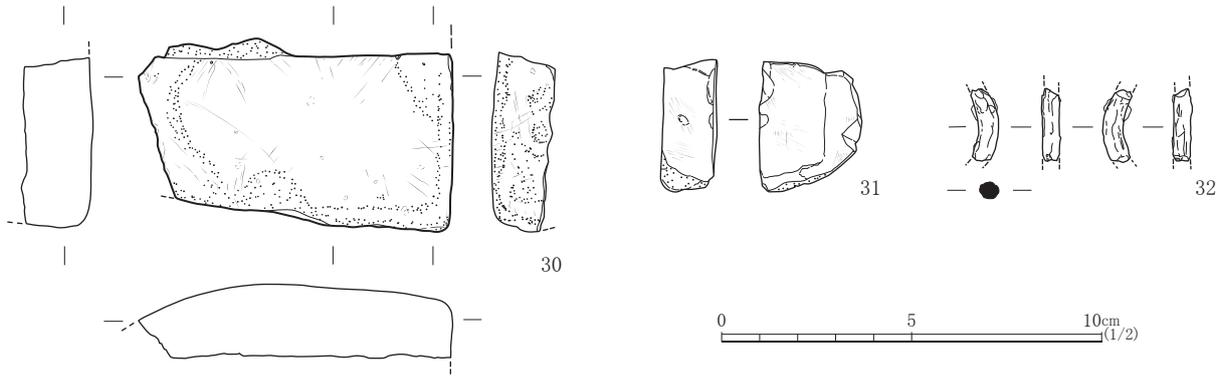


図 14 出土石器・鉄器実測図

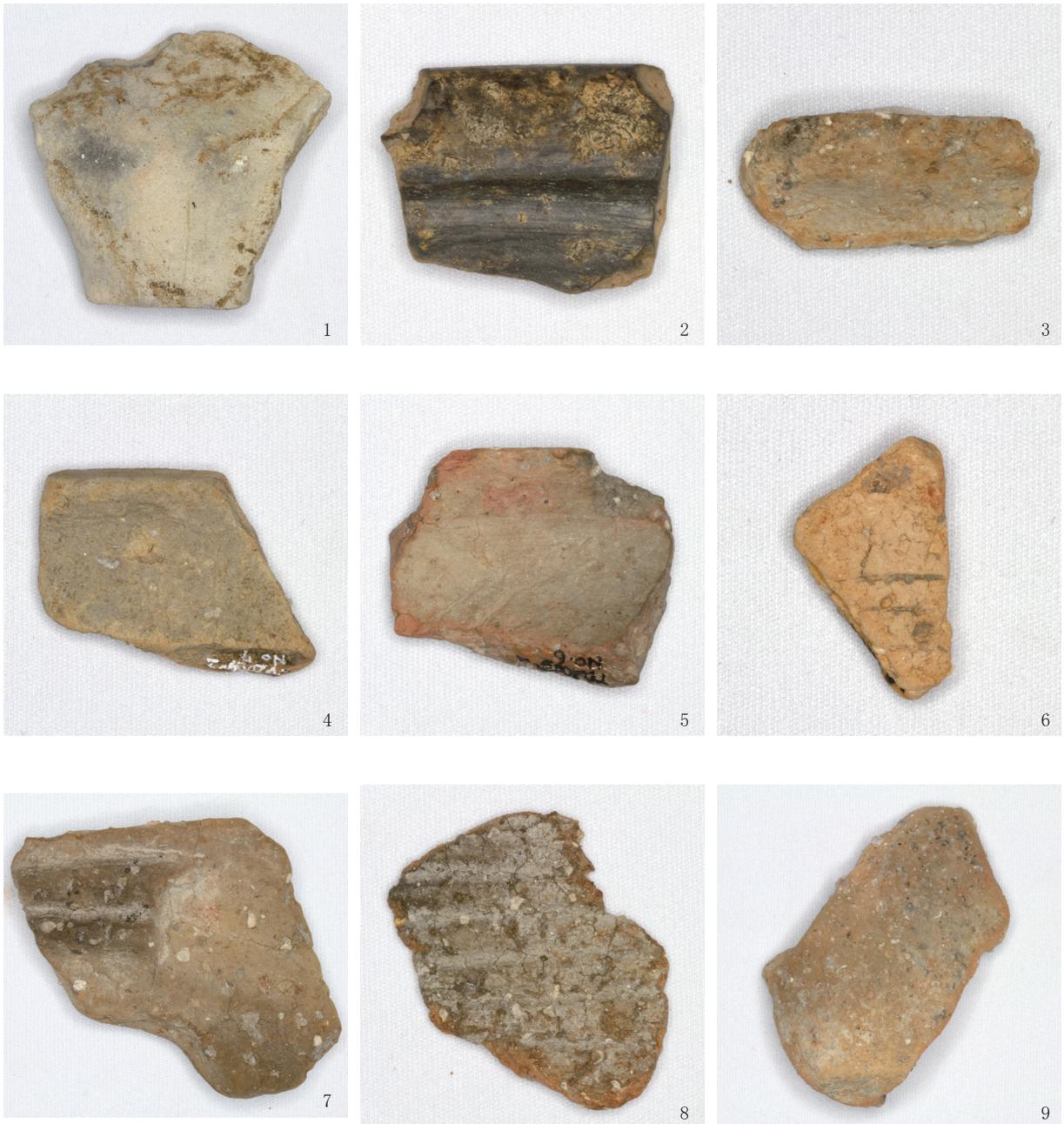


写真 42 出土土器①

吉田構内(吉田遺跡)の調査

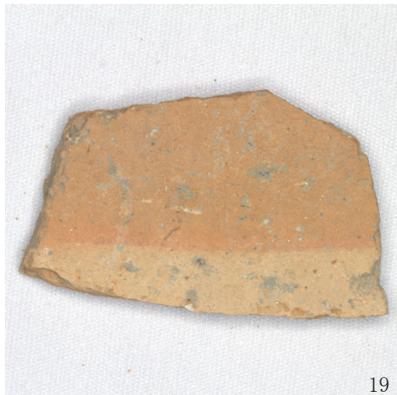


写真 43 出土土器②



写真 44 出土土器③・石器・鉄器

表4 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	第1調査区 断面	瓦質土器 焙烙	把手			①灰色(N6/ ②灰色(2.5Y8/2)	密:1~2mmφの砂粒少量混 ざる	
2	第2調査区 包含層3	縄文土器 浅鉢	口縁部			①②黒褐色(2.5Y3/1)	密:0.5mmφ以下の砂粒ごく 少量混ざる	
3	第2調査区 包含層	弥生土器 甕	口縁部			①灰黄色(2.5Y7/2) ②にぶい黄褐色(10YR7/4)	密:0.5~3mmφの砂粒多量に 混ざる	口唇刻み目
4	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	口縁			①褐灰色(10YR6/1) ②灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗:1~2mmφの砂粒少 量混ざる	
5	第2調査区 包含層	弥生土器 甕	口縁			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	やや粗:1~2mmφの砂粒多く 混ざる	
6	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	体部			①浅黄褐色(7.5YR8/6) ②明黄褐色(10YR7/6)	粗:1~2mmφの砂粒極が混 ざる	
7	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	頸部			①にぶい黄褐色(10YR5/3) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	粗:0.5~2mmφの砂粒多く混 ざる	
8	第2調査区 包含層	弥生土器 壺	頸部			①褐灰色(10YR6/1)	粗:1~3mmφの砂粒少量多く 混ざる	
9	第2調査区 包含層	弥生土器 甕か	底部			①にぶい黄褐色(10YR6/3) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	粗:1~2mmφの砂粒多く混ざ る	風化激しい
10	第2調査区 包含層	弥生土器 壺か	底部			①灰黄褐色(10YR5/2) ②褐灰色(10YR4/1)	粗:1~3mmφ砂粒多く混ざる	風化激しい
11	第3調査区 包含層1	弥生土器 甕	口縁~ 体部	①(18.5)		①黒褐色(10YR3/1) ②黄灰色(2.5Y8/3)	粗:3~6mmφの砂粒多量に 混ざる	
12	第3調査区 包含層1	弥生土器 甕	口縁~ 体部			①にぶい黄色(2.5Y6/3) ②浅黄色(2.5Y7/3)	やや粗:0.2~2mmφ砂粒や や多く混ざる	
13	第3調査区 包含層1	弥生土器 甕	口縁部			①にぶい橙色(7.5YR6/4) ②にぶい黄褐色(10YR6/3)	密:0.2~1mmφの砂粒少量 混ざる	
14	第3調査区 包含層1	弥生土器 甕か	口縁部			①②にぶい黄褐色 (10YR5/3)	粗:0.5~2mmφの砂粒多量に 混ざる	
15	第3調査区 包含層1	弥生土器 甕	口縁部			①にぶい橙色(7.5YR7/4) ②灰黄褐色(10YR6/2)	やや粗:1mmφの砂粒混ざる	風化激しい
16	第3調査区 包含層1	弥生土器 鉢か	口縁部			①橙色(7.5YR7/6) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)	密:0.2~3mmφの砂粒少量 混ざる	
17	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	体部			①にぶい黄褐色(10YR7/4) ②浅黄褐色(10YR8/4)	粗:2~4mmφの砂粒多く混ざ る	
18	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	体部			①②浅黄褐色(10YR8/3)	粗:1~3mmφの砂粒多く混ざ る	
19	第3調査区 包含層1	弥生土器 壺	体部			①にぶい黄褐色(10YR7/4) 塗彩:にぶい橙色(5YR6/4) ②浅黄色(2.5Y7/3)	密:0.2~0.5mmφの砂粒極少 量混ざる	外面塗彩
20	第3調査区 包含層1	弥生土器 高坏	坏部			①にぶい橙色(7.5YR7/3) ②にぶい黄褐色(10YR5/3)	密:0.2~2mmφの砂粒極少 量混ざる	
21	第3調査区 包含層1	弥生土器 甕	底部	②(6.6)		①橙色(7.5YR6/6) ②にぶい黄褐色(10YR6/3)	密:0.3~1.5mmφの砂粒やや 多く混ざる	
22	第3調査区 包含層1	弥生土器 鉢	完形	①(10.9) ②(2.4) ③5.9		①浅黄褐色(10YR8/3) ②にぶい黄褐色(10YR7/3)	密:0.3~2mmφの砂粒少量 混ざる	風化激しい
23	第3調査区 包含層3	弥生土器 甕	口縁部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②浅黄褐色(10YR8/3)	密:0.5~2mmφの砂粒多く混 ざる	
24	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部			①②にぶい 橙色(7.5YR6/4)	密:0.3~2mmφの砂粒やや 多く混ざる	
25	第3調査区 包含層3	弥生土器 甕か	体部			①灰黄色(2.5Y7/2) ②灰白色(2.5Y7/1)	密:0.2~2.5mmφの砂粒多く 混ざる	
26	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部			①浅黄褐色(10YR8/3) ②灰白色(2.5Y8/2)	密:0.3~3mmφの砂粒やや 多く混ざる	
27	第3調査区 包含層3	弥生土器 壺	体部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②灰白色(10YR8/1)	密:0.2~2.5mmφの砂粒やや 多く混ざる	
28	第3調査区 包含層3	弥生土器 甕	体部			①にぶい黄褐色(10YR7/3) ②にぶい 橙色(7.5YR6/4)	密:0.3~2mmφの砂粒少量 混ざる	土製円盤と して転用か
29	第3調査区 断面	須恵器 坏	口縁部			①②灰白色(7.5Y7/1)	精緻	

表5 出土遺物(石器・鉄器)観察表

法量()は残存値

遺物 番号	遺構	種別	法量(cm)	備考
30	第3調査区 包含層	砥石	残存長(8.2) 残存最大幅(5.15) 残存最大厚(1.9) 重量125.1g	残存する2面を主に使用
31	第3調査区 包含層3	砥石	全長3.45 最大幅2.7 最大厚1.35 重量20.46g	表裏・1側面を集中的に使用
32	第3調査区 包含層3	棒状鉄製品	残存長(1.87) 最大厚0.5 重量0.77g	緩やかに湾曲する棒状製品

器高5.9cmを測る。

23～28は包含層3出土弥生土器。23は甕口縁一体部片。直立する口縁の外端をやや肥厚させ、上端に面を取る。口縁下に7条の櫛描き沈線を施し、その下位に刺突文を付加する。24は壺体部片。外面に二枚貝により無軸羽状文を施す。25は甕体部片か。残存する外面には、2条の平行沈線とその上下に刺突文が施されている。26は壺体部片。外面に二枚貝による有軸羽状文が施されている。27は壺胴部片。貼り付け突帯端部に刺突文が施される。28は甕体部片。外面には4条の櫛描き沈線が見られ、内外面とも縦ハケが施されている。また外面沈線下には種子状の圧痕が見られる。当資料は、破断面が摩滅しており、平面形態が不自然に円形となっていることから、土製円盤として転用されている可能性を残している。

29は断面精査中に出土した須恵器坏口縁部片。口縁端部を尖り気味に丸く収めている。内面口縁下に凹線が巡るが、意図的なものか不明である。所属層位不明。

この他、第3調査区からは石器と鉄器も出土している。30は砥石。3面を欠失している。表面と短側面を使用面としており、長側面は原面を残す。残長8.2cm、最大幅5.15cm、最大厚1.9cmを測る。重量は125.1g。31も小型の砥石。表裏面と片長側面を主使用面としている。全長3.45cm、最大幅2.7cm、最大厚1.35cmを測る。重量20.46g。32は棒状鉄製品。断面楕円形の棒状製品であり、緩やかに湾曲しているが、両端を欠失している。残長1.87cm、断面0.46～0.5cmを測る。重量0.77g。30は包含層1、32・33は包含層2出土である。

(6)まとめ

今回の調査により、吉田構内南端部である野球場縁辺部には遺構及び遺物包含層が良好な状態で遺存していることが明らかとなり、既往の調査成果を裏付ける結果となった。

第1調査区では、時期不明ではあるが大学移転時の造成で削平されながらも地山上面に密に遺構が分布することが確認された。第2・第3調査区では、弥生時代の2～3枚の弥生時代遺物包含層が確認された。遺物の遺存状態は良好とは言えないものの、量的には豊富であった。調査地周囲に弥生時代の生活域が存在していることは明らかであり、3調査区における地山面の標高を見る限りでは、高地である野球場東側に集落が形成され、西側の低地に遺物包含層が形成されたと想像される。昭和42年(1967)に野球場縁辺部で実施された調査にて確認された「弥生中期の堅穴住居跡」も、その信憑性が高まったと言えるのではなかろうか。

防球ネット設置工事との関わりで述べると、支柱を保持する根カセ(幅0.5m×長さ1.5m規模)の設置深度は地下0.6m地点であるため、遺構面および遺物包含層の破壊は免れるものと判断される。支柱自体の設置に関しては、地下3mまでボーリングが行われることから、遺跡の破壊は免れ得ない。工事は0.45mφの支柱を入れるボーリングであるため、工事中の立会は埋蔵文化財保護上無意味と判断された。調査終了後、埋蔵文化財資料館専門委員会での審議において、予備発掘調査をもって埋蔵文化財保護対応を終了し、工事着手を承認することとなった(平成21年度第5回埋蔵文化財専門委員会:平成21年7月29日開催)。

支柱は野球場縁辺19地点に入るため、ボーリングによる遺跡破壊総面積は5㎡弱に及ぶ。埋蔵文化財の破壊が最小限に止まったことを願うとともに、破壊規模の大小によらず、より有効な埋蔵文化財保護対応の確立に向けて、今後も度重なる検討が必要であろう。

3. 教育学部A棟改修工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区 吉田構内H・I-17・18区、J-18区、E-20区

調査面積 約46.6㎡(予備発掘調査35.3㎡、立会調査11.3㎡)

調査期間 予備発掘調査 平成21年8月5～20日
立会調査 平成21年6月11日、11月13日、平成22年1月26日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図15・16)

吉田構内において、教育学部A棟及び講義棟の改修工事が決定し、設備改修や環境整備に伴う掘削工事が行われることになった。教育学部A棟周辺においては、これまでほとんど調査が行われておらず、地下の状況に不明な点が多い。以上の点を踏まえ、平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会(3月18日開催)において、当該工事における埋蔵文化財の取り扱いについて協議した結果、予備発掘調査(A～E調査区)・立会調査(F調査区・G～I地点)を実施することになった。

(2) A～E調査区(図17・18、写真45～50)

a. 基本層序

A～D調査区は階段・花壇等の基礎部分で工事掘削が現地表面下約60cmまでの予定であったため、60cm以下の掘削は一部にとどめた。E調査区は検水槽新設箇所調査区北部の側溝上面から約145cm下まで掘削を行った。基本層序は下記の通りである。

第1層: 表土(層厚約20～30cm)

第2層: 造成土(層厚約60～100cm)

第3層: 旧耕土(層厚約20cm)

第4層: 旧床土(層厚約5～10cm)

第5層: 地山(A～D調査区: 層厚15cm以上、E調査区: 層厚130cm以上)

A調査区は、現地表面下約100cmまでが第2層、以下、約100cmで第4層: オリーブ灰色(10Y6/2)シルト、約120cm、標高18.25mで第5層: 緑灰色(7.5GY6/1)シルトを検出した。

B調査区は、現地表面下約62cmまで掘削を行ったが、既設のコンクリート基礎による攪乱が著しかったため、掘削を一部にとどめた。その結果、第3層: オリーブ灰色(2.5GY5/1)シルトを検出するにとどまった。

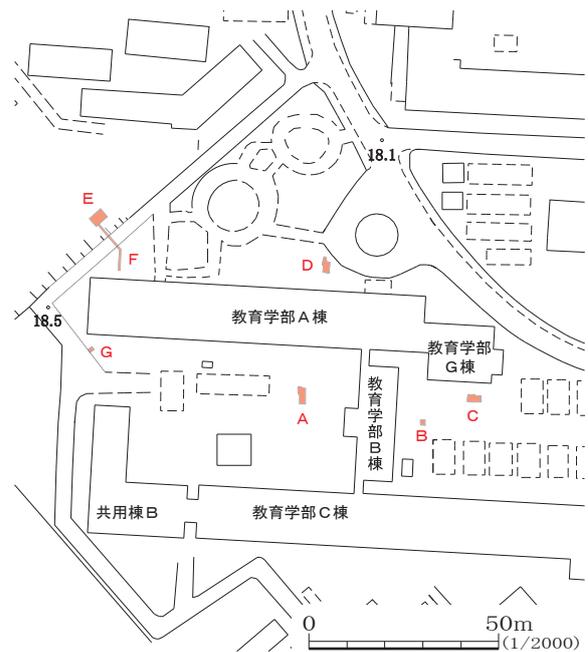


図15 調査区位置図1

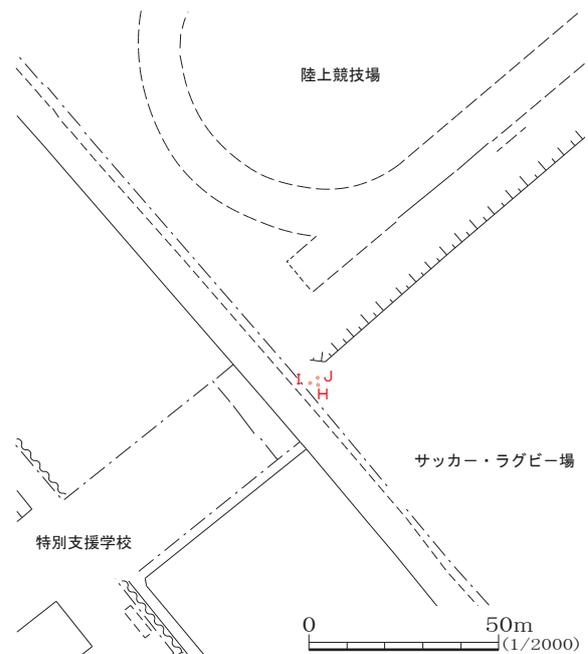


図16 調査区位置図2

C調査区は現地地表下約60cmまでが第2層、以下、約60～78cmで第3層:灰色(5Y5/1)シルト、約78～80cmで第4層:オリーブ黄色(5Y6/3)シルト、約80cm、標高18.5mで第5層:緑灰色(7.5GY6/1)シルトを検出した。

D調査区は、現地地表下約115cmまでが第2層で、以下、約115～135cmで第3層:灰色(5Y6/1)シルト、約135～140cmで第4層:灰オリーブ色(5Y5/2)シルト、約140cm、標高18.08mで第5層:青灰色(5BG6/1)シルトを検出した。

E調査区はグラウンドの傾斜面に位置する。既設管等による攪乱が著しかったため、南西壁のみで土層を確認した。調査区北部では、現地地表下約7cmまでが第2層、以下は第5層であった。第5層のうち、標高17.4～17.2mが黄灰色(10YR4/1)シルト、標高17.2～16.8mが灰オリーブ色(7.5Y6/2)シルト、標高16.8～16.56mがオリーブ灰色(2.5GY6/1)シルト、標高16.56～16.25mが灰色(7.5Y5/1)シルト、標高16.25～16.06mがオリーブ灰色(5Y6/3)シルトであった。

b.遺構・遺物

A～E調査区において遺構・遺物は皆無であった。

(3) F調査区・G～I地点(図17、写真51～54)

F調査区は排水管新設箇所である。現地地表下約40～50cmまで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。

G調査区は排水管新設箇所である。現地地表下約120cmまではコンクリート・造成土で、以下、約120～178cmが浅黄色(7.5Y7/3)シルト、178～200cmが灰色(5Y5/1)粘質土であった。浅黄色シルト以下は地山に近似するが、同層には縄文土器片(後～晩期か)が含まれていたため、河川堆積土である可能性がある。

H～I地点は仮設電柱設置箇所である。H地点で現地地表下約90cm、I地点で約30cm、J地点で約25cmまで掘削が行われたが、いずれも造成土の範囲内であった。

(4)小結

A～D調査区においては工事予定掘削深度内で地山は検出されず、A・C・D調査区で第2層、B調査区で第3層内にとどまり、埋蔵文化財には支障はないことが判明した。また、深掘りを行った地点においても地山は検出されたものの、遺構・遺物は皆無であった。以上からA～D調査区周辺は埋蔵文化財の分布が希薄であることが推測されるが、調査面積が狭小であるため、今後も慎重な対応が求められよう。また、E調査区は第2層直下で第5層が検出され、グラウンド造成等による攪乱が著しいことが判明した。立会調査においてはG地点の浅黄色シルトから縄文土器片が出土したことが注目される。G地点の約50m南に位置する共用棟B敷地^{註1}では縄文時代の遺物包含層、土壌1基が検出されていることから、周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性が高い。このため今後の開発工事において、G地点周辺では特に注意が必要である。

【註】

- 1)河村吉行(1982)「第3章第2節 教育学部H-19区の発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報1』,山口



図17 調査区詳細図

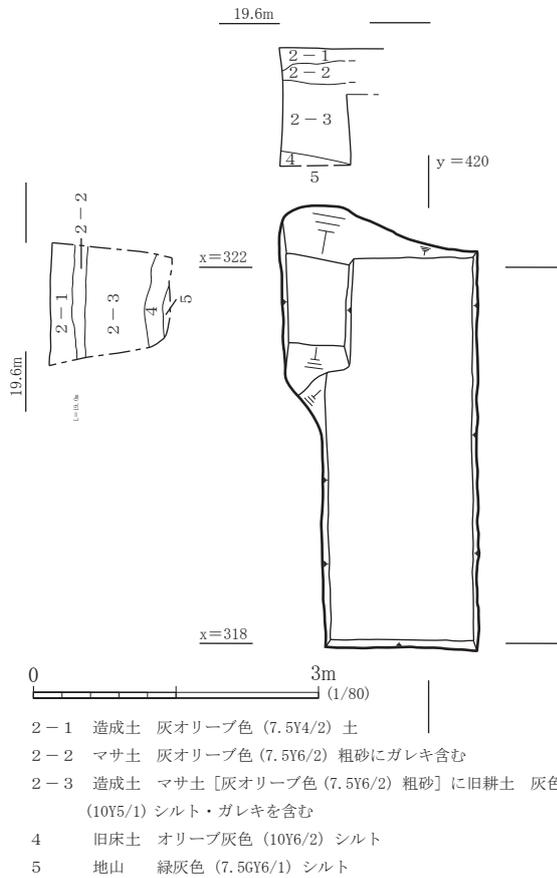


図18 A調査区平面図・断面図



写真45 A調査区全景(北から)



写真46 A調査区北西部土層断面(南西から)



写真47 B調査区全景(南から)



写真48 C調査区北西部土層断面(南東から)



写真49 D調査区全景(北から)



写真50 E調査区南西壁土層断面(北東から)



写真51 F地点土層断面(東から)



写真52 G地点土層断面(北東から)



写真53 G地点土器出土状況(北東から)



写真54 H地点土層断面(北西から)

4. 里山整備工事に伴う予備発掘調査・立会調査

調査地区 吉田構内Q-10、O・P・Q-11区
調査面積 約758㎡(予備発掘調査約36.9㎡・
 立会調査約680.1㎡)

調査期間 予備発掘調査 平成22年2月15～17日
 立会調査 平成22年2月24日、
 3月2日、3月31日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図19)

吉田構内東北部に位置する丘陵、通称「もり山」を「共育の丘」として活用することが決定したことに伴い、頂上にモニュメント・東屋、石彫方位盤を設置し、遊歩道の整備が行われることになった。「もり山」には横穴墓が存在することが早くから知られており、現状で1基が開口している。また、頂上には円墳が存在するとも伝えられていることから、埋蔵文化財が存在する可能性が十分に考えられた。このため、平成21年度第11回埋蔵文化財資料館専門委員会(1月21日開催)で埋蔵文化財の取り扱いを協議した結果、丘陵頂部(A～I調査区)について予備発掘調査、その他の地点については立会調査を実施することになった。

(2) 予備発掘調査(図20・21、写真57～60)

a. 基本層序

予備発掘調査区は芝生広場として整備し、モニュメントを設置することになった箇所である。調査前は森林であったが、長年に渡って整備が行われておらず、倒木により根が起こされた箇所が多数存在するなど、かなり荒れた状況であった。現地形は東北から南西にかけて降下している。標高は表土(層厚約10～30cm)除去後において、A調査区北東部で56.106m、I調査区南西部で54.962mである。基本層序は第1層:表土、第2層:旧耕土(層厚約5～37cm 黄褐色(2.5Y5/3)粘質土)、第3層:地山(層厚20cm以上 明茶褐色(5YR5/6)粘質土及び同色を主体とする岩盤・岩盤風化土)である。第2層は根による浸食が著しい。

b. 遺構・遺物

調査区は森林となる前は畑だったようであり、A調査区以外で第2層が認められたが、遺構・遺物は皆

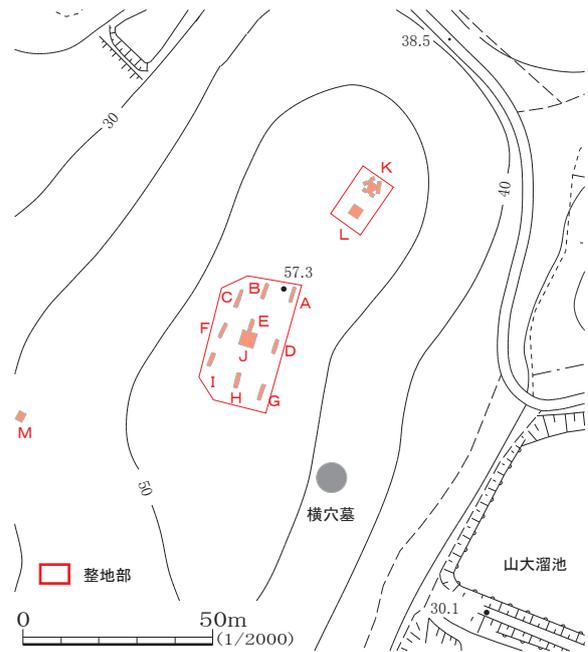


図19 調査区位置図



写真55 調査前全景(西上空から)



写真56 横穴墓(南東から)

無であった。調査区北部における地山の標高は、56.1m、B調査区北部で56.0m、C調査区北部で55.2m、D調査区北部で56.0m、E調査区北部で55.9m、F調査区北部で55.2m、G調査区南部で54.9m、H調査区南部で55.1m、I調査区南部で54.8mである。

(3) 立会調査(写真61～64)

J地点はモニュメント設置箇所、L地点は石彫方位盤設置箇所である。予備発掘調査区同様の状況であったため、表土除去後に調査を行った。J地点では現地表下約60cmまで掘削したが、すべて地山の範囲内であった。K地点は現地表下約37cmまでが明茶褐色(5YR5/6)粘土、約37～84cmがにぶい橙色(5YR7/3)を主体とする岩盤風化土であった。L地点は現地表下15cmまでが造成土、約43～58cmが明茶褐色(5YR5/6)粘土であった。M地点は遊歩道の拡幅に伴い、法面の拡幅が行われた。現地表下約15cmまでが表土、約15～120cmが明赤褐色(5YR5/6)粘質土の地山であった。

(4) 小結

今回の調査の結果、遺構・遺物は皆無であり、埋蔵文化財に支障はなかった。「もり山」には、南部に宅地・畑跡と見られる平坦面や防空壕が存在するなど、土地改変が顕著な箇所も存在する。しかし、横穴墓は基数を含めて詳細は不明であり、地下の状況には不明な点が多い。このため、今後とも埋蔵文化財の保護に十分注意する必要がある。

【註】

- 1) 石川卓美(1972)『平川文化散歩』,山口市平川公民館(編),山口
- 2) 平成19年に横穴墓の位置、「もり山」の旧状等について統合移転前の旧住民を含む平川地域の方々から多大なご教示を得た。
- 3) 森田孝一(1985)「第6章 吉田構内学生会館ケーブル布設に伴う発掘調査」山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報IV』,山口

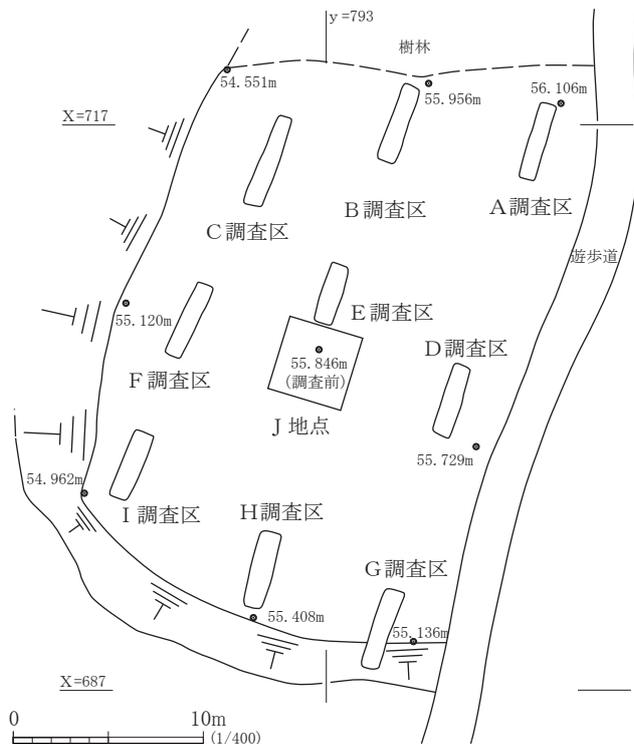
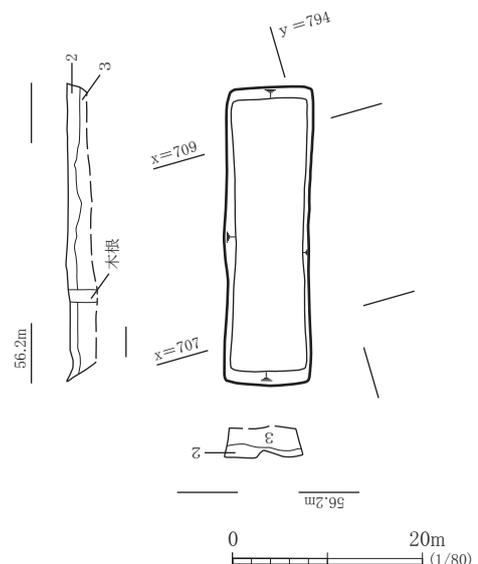


図20 調査区詳細図



- 2 旧耕土か、黄褐色(2.5Y5/3)粘質土
- 3 明褐色(5YR7/2)、黄褐色(10YR7/8)、橙色(5YR6/4)、青灰色(5B5/1)の風化した片岩(上部を中心ににぶい橙色(5YR6/4)粘質土を含む)

図21 E調査区平面図・断面図



写真57 A調査区全景 (南西から)



写真58 C調査区全景 (南東から)



写真59 E調査区全景 (北東から)



写真60 I地点全景 (北東から)



写真61 J調査区全景 (南東から)



写真62 K調査区全景 (南東から)



写真63 L調査区全景 (南東から)



写真64 M調査区全景 (北東から)

5. 新教育研究棟新営工事に伴う立会調査



図22 調査区位置図1



写真65 B地点土層断面(南東から)

調査地区 吉田構内L-13、14、M-11、12、
N-12区

調査面積 約340.5㎡

調査期間 平成21年4月9日、11日、29日、7月
2、3、6日、9月17日、11月18日

調査担当 田畑直彦

調査結果

(1) 調査の経緯(図22)

吉田構内において、新教育研究棟新営工事が決定したのに伴い、昨年度に引き続き立会調査を実施した。今回の調査対象は設備及び周辺環境整備に伴う掘削工事である。

(2) A～C調査区(図22、写真65～67)

A調査区では電気設備工事に伴う掘削が行われた。東端部の枘設置箇所では、現地表下約1.2m(標高20.4m)で、直径約15cm・深さ5.5cmのピット1基を検出した。遺物は出土していない。他の箇所は現地表下約100cmまで掘削したが、造成土の範囲内であった。

B調査区は外灯の新設工事に伴う掘削が行われた。現地表下約17cmで赤褐色(5YR4/4)粘土の地山が検出されたが、遺構・遺物は皆無であった。

C調査区は設備及び正門導線(道路)整備に伴う掘削工事が行われた。なお、設備関連工事に伴う掘削では壁面の崩落が著しかったため、記録作業

及び遺物の回収ができなかった。一方、導線整備に伴う掘削工事では、設備関連工事に伴う本発掘調査^{註1}で検出した谷を再検出した。谷は本発掘調査で確認したように南東-北西方向に延びている。また、C-1地点では標高19.6mで谷の肩部があり、緩やかに南側に落ち込んでいる状況を確認した。

(3) D調査区(図23、写真69・70)

D調査区は新教育研究棟敷地よりも1段高く、車両通行時の視界が不良となるため、削平されることになった箇所である。同棟新営工事に伴う本発掘調査区^{註2}の北側に隣接することから、遺構が分布することが予想された。このため、施工業者に遺構面まで機械掘削を依頼し、記録作業を実施した。層序は敷地本発掘調査と同様であるので、同報告を参照されたい。調査の結果、遺物包含層の直下で検出した遺構面から溝1条、ピット39基、落ち込み3基を検出した。このうちSX1～4については掘削を行っていない。遺構面は東-西方向に緩やかに傾斜しており、西部は統合移転前に存在した棚田により削平を受けている。検出したピットのうち、Pit25、26は敷地本発掘調査時に検出したピットの再検出である。また、Pit20、30～32は敷地本発掘調査時に検出したSB1、SX4はSX3の延長部分と考えられる。検出した遺

構の深さはPit40のように約50cmのものもあるが、大半は20cm以内であった。出土遺物には、遺物包含層から出土した土師器、須恵器、瓦質土器、青磁片、Pit25・28・30・32・34から出土した土師器微細片、Pit31から出土した鉄製品(図24 刀子か?長さ4.0cm、幅1.7cm、厚さ0.5cm、重量12.60g)がある。

(4) E・F区(図22、写真71・72)

E調査区は桜の移植箇所である。平面形80cm×80cmで現地表下約35～50cmの規模で掘削が行われた。調査の結果、E-1地点で現地表下約15cmで褐灰色(10YR4/1)シルトの遺物包含層を検出した。また、E-2～7地点では現地表下約20～30cmで岩盤風化土を主体とする地山を検出した。E-8・9は現地表下50cmまで掘削が行われたが、すべて造成土の範囲内であった。

F調査区は導線(道路)造成後、雨天時に顕著な湧水を排水するために新設された排水溝新設箇所である。このうち、F-1地点では現地表下10cmで、明青灰色(5B7/1)シルトを検出した。また、F-2地点付近では現地表下約40cmで谷埋土の一部と考えられる灰色(7.5Y4/1)シルトを検出した。両調査区から遺物は出土しなかった。

(5) 小結

今回の調査では、平成20年度に検出した谷や遺構の延長部を検出するなど、大きな成果を得ることができた。今回の調査区を含め、新教育研究棟周辺は地形が大幅に改変されてしまったが、埋蔵文化財が遺存している箇所も多い。また、谷については西肩が検出できていないため、その規模は不明である。このため、今後も調査区周辺においては埋蔵文化財の保護に十分な注意を払う必要がある。

【註】

- 1) 田畑直彦(2012)「第1章第2節3 新教育研究棟設備関連工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口
- 2) 田畑直彦(2012)「第1章第2節4 新教育研究棟新営に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口

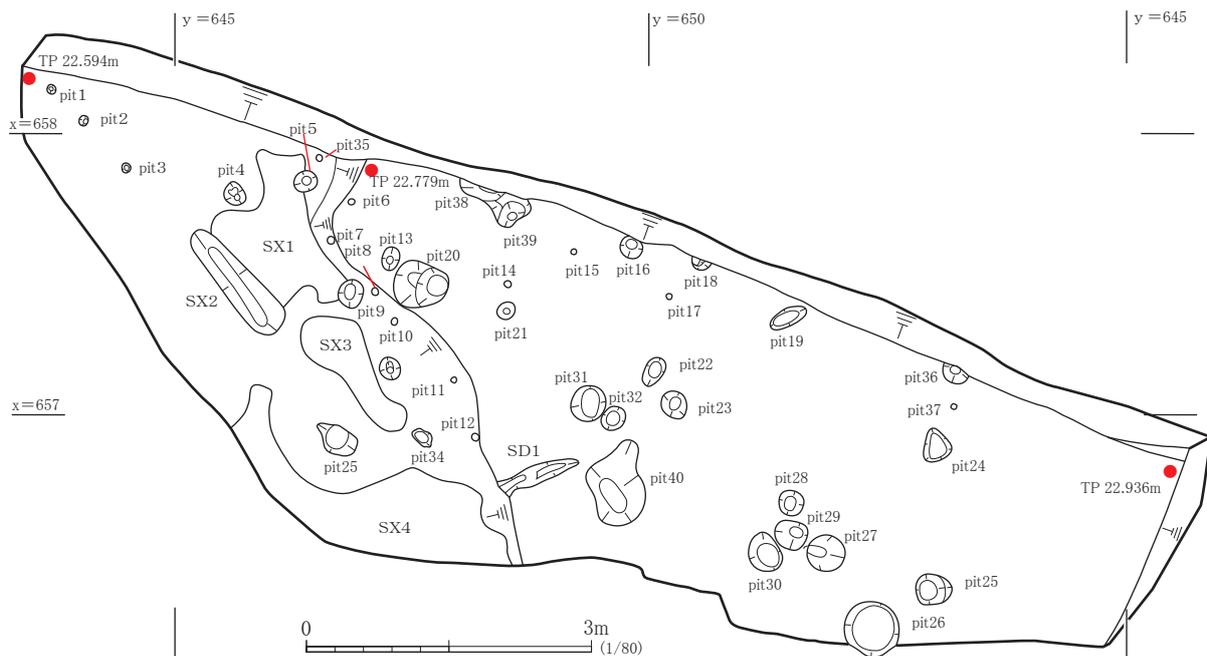


図 23 D調査区平面図

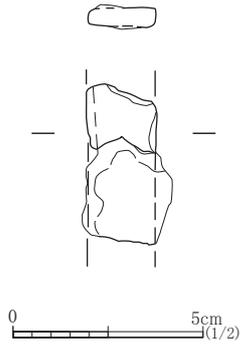


図24 出土遺物実測図



写真66 出土遺物



写真67 C地点河川検出状況(北西から)



写真68 C-1地点土層断面(北西から)



写真69 D地点遺構検出状況(南西から)



写真70 D地点溝・柱穴完掘状況(南西から)



写真71 E-1地点土層断面(北西から)



写真72 F-2地点土層断面(北西から)

6. ビオトープ周辺雨水排水管取設工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内L・M-10、11区

調査面積 約60㎡

調査期間 平成22年3月8、12、15、19、23日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田構内において、ビオトープへの導水、周辺雨水管の改修を目的とした排水管取設工事が決定したのに伴い、立会調査を実施した。調査区は、南東側が道路に沿って丘陵が削平されており、北西側は実験水田を埋め立てた状態であった。工事は北西－南東方向の管路2本と排水柵5箇所を新設するものである。

調査の結果、管路では、北西側(道路より西側)で現地表下約150～230cmまで掘削が行われたが、いずれも造成土の範囲内であった。一方、南東側においては地山が削平されている状況が認められた。このうち、A地点(南壁)においては現地表下約110cmまでが造成土、約110～220cmが黄橙色(10YR7/8)粘質土であった。また、B地点においては現地表下約184cmまでが造成土で、約184～220cmが黄橙色(10YR7/8)粘質土であった。その他の地点を含め、調査区内において遺構・遺物は検出されなかった。

A・B地点の状況から、調査区周辺においては東側の丘陵部を削平して、西側に厚く盛土がなされていることが判明した。ただし調査区北西側においては盛土を確認したに過ぎず、地下の状況は不明である。調査区の約20m南側においては、平成19年度に実施した吉田寮前排水管敷設工事^{註1}で、遺物包含層と考えられる黒褐色粘質土が検出されている。このため、調査区周辺においては、今後の開発工事にあたって埋蔵文化財の保護に留意する必要がある。

【註】

- 1) 田畑直彦(2011)「第1章第2節5 吉田寮前排水管敷設に伴う立会調査」、山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成19年度－』, 山口

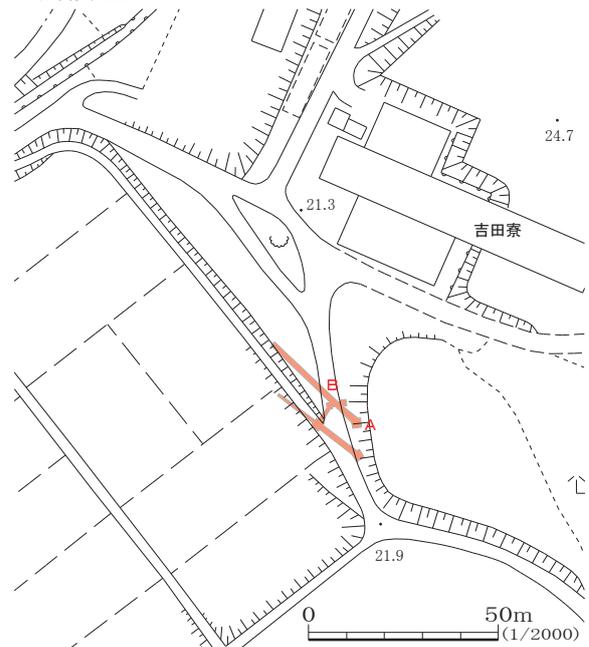


図25 調査区位置図



写真73 調査区東部(西から)



写真74 A地点土層断面(北から)

7. 仮設高圧線引き込み工事に伴う立会調査

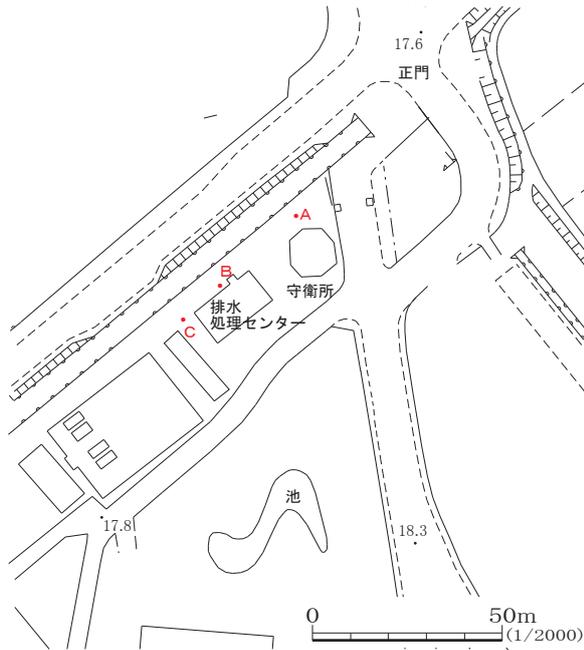


図26 調査区位置図

調査地区 吉田構内H-12区

調査面積 約7㎡

調査期間 平成22年3月23日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田構内では、新規建物の増加と改修工事の進展等により電力の需要が増加し、既往の設備では対応が困難になったため、応急措置として仮設仮設高圧線の引き込み工事が行われることになった。工事は守衛所・排水処理センター周辺の3箇所(A～C)地点において電柱を設置するものであり、ボーリングによる掘削工事(掘削深度約200cm)が計画されたため、立会調査を実施した。

調査の結果、A地点では現地地表下約100cmまでは造成土であったが、以下については手が届かず壁面が汚れていたため、確認することができなかった。B地点では、現地地表下約140cmまでが造成土、約140～170cmが緑灰色(10GY6/1)シルト、約170～230cmが黒褐色(10YR3/1)粘質土であった。C地点では、現地地表下約100cmまでが造成土であること、現地地表下約200cm付近の土層が黒褐色(10YR3/1)粘質土であることは確認できたが、A地点と同じ事情により、詳細は確認することができなかった。また、A～C地点から遺物は出土しなかった。

平成6年度に実施された排水処理センターの増築(実験廃液処理施設新営)^{註1}に伴う試掘調査では、現地地表下約150cm(標高16.6m)で青灰色砂礫・明緑灰色シルト、160cm以下(標高16.5m)で明茶灰色粘土・暗褐色粘土が検出されている。以上はB地点で確認された層序と近似しており、B・C地点で検出した黒褐色粘質土は平成6年度調査の明茶灰色粘土・暗褐色粘土に対応するものと考えられる。両層は縄文時代以前に形成された層と考えられるが、遺物は出土しておらず、詳細は不明であるため、今後の調査による解明が待たれる。



写真75 B地点土層断面(北西から)



写真76 C地点土層断面(北西から)

【註】

- 1) 豆谷和之(2000)「第4章2 実験廃液処理施設新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XII』,山口

8. ため池整備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内S-8区

調査面積 130m²

調査期間 平成21年12月7日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果 吉田構内北東部に位置する農学部附属農場敷地には、北東-南西方向に大小2基のため池が存在する(写真77・図27)。この内、北東部に位置するため池の漏水が指摘されたことを受け、堤および取水口の整備工事が計画された。当ため池は、江戸時代中期成立の絵図「地下上申絵図吉田^{註1}村」に「小サコ堤」として描かれていることから、築造年代の下限の一端を知ることができる。

整備工事は、南側堤の一部を切り通し、取水口を新たに設けるという計画であり、考古学見地からため池の築造年代を解明する機会と考えられたため、平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年7月29日開催)にて審議され、工事中の立会調査が決定された。

立会調査は堤の切り通し掘削が終了した平成21年12月7日に実施した。堤の断面を精査した結果、盛土は少なくとも2度の改修が行われているものの(写真78)、確認された最古の盛土中にコンクリート片が検出されたため、断面実測等の記録作業は行わなかった。

かつて筆者は農学部附属農場棟周辺域での中世集落の形成に言及したことがあるが、ため池の成立年代も集落形成に大きく関連する問題である。^{註2}土地活用の状況から周辺地での開発工事等は今後も少なからうが、引き続き埋蔵文化財保護対応には注意が必要である。

【註】

- 1) 山口県文書館所蔵
- 2) 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成20年度-』,山口



図 27 調査区位置図

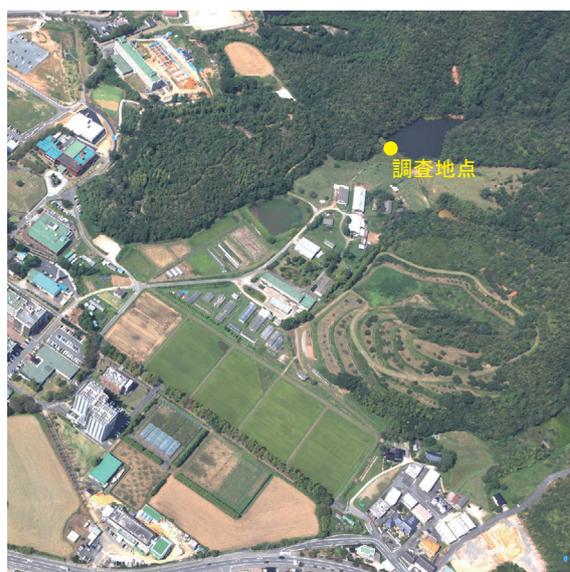


写真 77 調査区周辺遠景(南東から)



写真 78 ため池堤断面(北西から)

9. 基幹整備(鑄鉄管改修)工事に伴う立会調査



図 28 調査区位置図

調査地区 吉田構内J-14・15区

調査面積 156㎡

調査期間 平成21年11月9・12日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内にて、鑄鉄管(ガス管)の改修工事が計画された。大部分は既設管の改修であったが、新規掘削管路が2ヶ所に存在(図28)したため、平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年7月29日開催)にて審議され、工事中の立会調査が決定された。

車庫西側に設けられた南北管路では、その大部分は本学吉田地区統合移転の際に削平されたようで、旧地形を留めていなかったが、管路北端部に一部その姿を認めることができた。土層断面精査により確認された層序は、①0.65mの造成土、②0.2mの旧耕土、③0.05m以上の黒褐色年質土である(写真79)。

本学本部棟と車庫が立地する場所は、姫山から派生する丘陵が東から西に張り出した部分に当たり、弥生時代以降、本学統合移転まで長期にわたり集落が形成されていたことが既往の調査により指摘されている。掘削地点は丘陵西端部に位置することから、最下部に確認された黒褐色粘質土層は遺物包含層と目される。

共通教育棟北側に設けられた東西管路では、①0.05mの表土(芝)、②0.55m以上の造成土を確認するに止まり(写真80)、埋蔵文化財の確認には至っていない。

今回の調査により、低丘陵上にあたる車庫北側空閑地には、遺物包含層および遺構が遺存する可能性が高まった。当該地での開発工事等地下の掘削を伴う計画には細心の注意を払う必要がある。



写真 79 A 地点土層断面 (南から)



写真 80 B 地点土層断面 (北西から)

10. 事務局外灯設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内J-14区

調査面積 1 m²

調査期間 平成21年8月21日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内事務局1号館西側空地にて、本学よさこいサークルの練習に活用する目的から外灯の設置工事が計画された(図29)。当該地は姫山から派生する東から西に延びる低丘陵の西側縁辺部であり、予定掘削深度から遺物包含層等に影響が及ぶ可能性が想定されたため、工事中に立会調査を実施することが平成21年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年8月17日開催メール審議)において決定された。

調査は外灯基礎掘削時に実施した。断面精査により確認された層序は、①0.2mの表土、②0.5mの灰色～赤褐色砂質土(造成土1)、③0.3mの灰白色粘質土(造成土2)、④明黄褐色砂礫土(地山)である(図30・写真81)。

地山検出面において基礎坑底面に精査をかけたが、遺構の検出には至らなかったため、さらなる掘削を許可し、記録作成後調査を終了した。

本学吉田地区統合移転時に実施された事務局本部1号館建設に伴う発掘調査では、弥生時代以降の遺物が多数出土しており、竪穴住居、土壇、溝、ピット等多数の遺構が検出されている^{註1}。本報告を刊行していないため遺構の評価がなされていない状況にあるが、遺跡地内でも遺構が密に分布する地域と言える。小規模な工事といえども、地下の掘削を伴う工事計画には今後とも慎重な対応が必要である。

【註】

1) 山口大学吉田遺跡調査団(1976)小野忠熙(編)『山口大学構内 吉田遺跡発掘調査概報』,小野忠熙(編),山口



図29 調査区位置図



写真81 調査区西壁断面(南東から)



図30 土層断面模式図(S=1/20)

11. 第1事務局庁舎東駐車場カーポート設置工事に伴う立会調査



図 31 調査区位置図

調査地区 吉田構内L-14区

調査面積 1.2㎡

調査期間 平成21年9月4日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内事務局1号館南東側身障者用駐車場において、カーポートの設置工事が計画された(図31)。0.5m四方の基礎工事を4ヶ所に実施するという小規模掘削工事であったが、東側に弥生時代から古墳時代、中世から近世にかけての集落跡が確認された「遺跡保存地区」が隣接することから(写真82)、平成21年度第6回埋蔵文化財資料館専門委員会(平成21年8月17日開催メール審議)において工事中に立会調査を実施することが決定された。

掘削4地点の基本層序は、以下の通りである。

A地点:①0.1mのアスファルト、②0.1mの砕石、③0.2mの造成土、④0.1mの旧床土、⑤明赤黄色粘質土(地山)

B地点:①0.1mのアスファルト、②0.1mの砕石、③0.1mの造成土、④0.1mの旧耕土、⑤0.1mの旧床土、⑥明赤黄色粘質土(地山)

C地点:①0.1mのアスファルト、②0.1mの砕石、③0.1mの造成土、④0.05mの旧耕土、⑤0.1mの旧床土、⑥明赤黄色粘質土(地山)

D地点:①0.1mのアスファルト、②0.1mの砕石、③0.13mの造成土、④0.03mの旧耕土、⑤0.07mの旧床土、⑥黄褐色粘質土(地山)

上記のように、当地点では0.45～0.5mで地山面に到達する。今回の調査では遺構等の確認には至らなかったが、事務局本部1号館建設に伴う発掘調査成果および遺跡保存地区の状況を見る限りでは、工事地周囲に埋蔵文化財が遺存する可能性は限りなく高い。小規模工事に対する埋蔵文化財保護対応に対し、長らく本学内にも様々な意見があるようであるが、教育・研究に邁進する大学として、物言わぬ学術資料に対し最大限の配慮、協力を願う次第である。



写真 82 工事計画地 (南西から)



写真 83 B地点土層断面 (西から)

12. 基幹環境整備(第1体育館周辺排水整備)工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内H-13区

調査面積 300㎡

調査期間 平成22年3月25日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内第1体育館周辺地において、大規模な排水整備工事が計画された。当計画は、地下の掘削を伴う工事計画として、平成20年度末の埋蔵文化財資料館専門委員会に提出されていたが、工事場所等の詳細が不明であったため、埋蔵文化財保護対応未定として保留した経緯があった。平成21年11月、工事計画の詳細が決定されたことを受け、管轄自治体の指導の下、当館館長、副館長、館員の協議により、新規掘削部分にのみ立会調査を実施することが決定された。

排水工事は、大部分が既設の排水溝を付け替える工事であり、新規掘削部分は正門西側の池から排水処理センター脱水施設前の排水溝に管路を繋ぐ部分のみである(図32)。

当該地は池周辺が明確に盛土であるものの、盛土の厚みが不明な状況にあった。立会調査は、掘削が終了した年度末の3月25日に実施した。

池に近く盛土が厚いと予測された記録地点Aの層序は、①1.3mの暗褐色砂土(造成土1)、②0.75mの黄色粘質土(造成土2)であり、盛土下位の状況を確認できなかった(写真84)。

盛土が低まる記録地点Bの層序は、①0.6mの暗褐色砂土(造成土1)、②0.15mのにぶい黄褐色粘土(造成土2)、③0.15m以上の灰黄色シルトであった(写真85)。前日に降った雨が流れ込んでくるため、最下部に確認した灰黄色シルトの断面・下面精査が行えなかったが、地山である可能性を有する。

当工事は計画期間が長く、翌平成22年度を通して実施される予定となっていた。平成22年度の工事立会成果については、追って報告を行いたい。

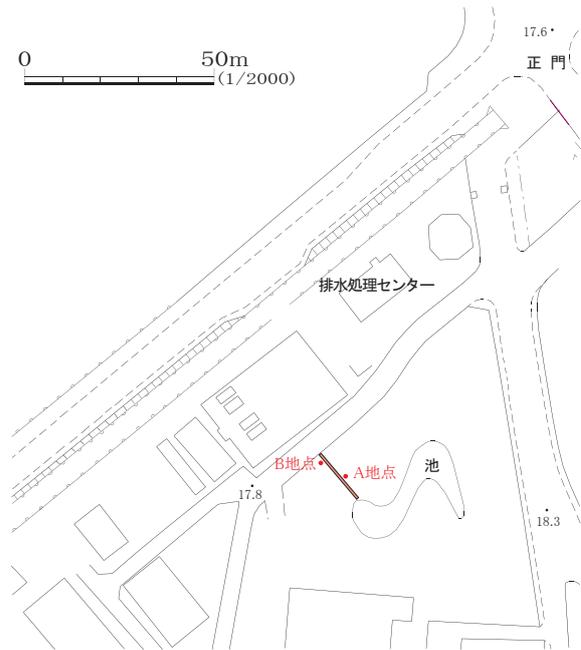


図 32 調査区位置図



写真 84 A地点北西壁土層断面(北西から)



写真 85 B地点南西壁土層断面(東から)

13. 男子学生寮東側丘陵災害復旧工事に伴う立会調査

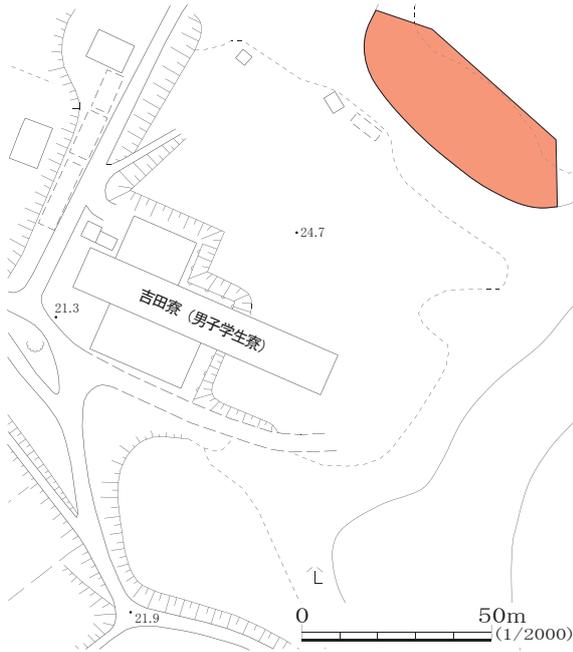


図 33 調査区位置図

調査地区 吉田構内N-8区、O-8・9区

調査面積 約700㎡

調査期間 平成22年2月2日

調査担当 横山成己

調査結果 平成21年7月21日、山口県広域が記録的な大雨洪水被害に襲われた。吉田構内が所在する山口市平川地区も長期間断水が続き、山口大学でも構内に給水所が設けられるとともに、学生に対し運動部部室のシャワー施設が解放されるなど、各種支援が行われた。

山口県内の人的被害に比して極めて小事であり、かつ私事ではあるが、筆者も当時実施していた野球場防球ネット設置工事に伴う予備発掘調査現場の安全確保と、水没した総合図書館機械室に対する排水ポンプの要請等で豪雨の中携帯電話が故障し、帰宅時には自家用車も故障していたことを記憶している。

吉田構内の被害も甚大で、男子学生寮東の丘陵が大きく崩落した(図33・写真86)。被災現場は長らく立ち入り禁止区域となっていたが、年明けに復旧が着手され、崩落した崖面に対し法面設置工事が施された。周知の埋蔵文化財包蔵地内であるため、埋蔵文化財保護対応が必要であったが、工事地内への進入は安全面から避けることとし、崖下から法面断面の観察を行うこととした。

丘陵上部の現況は不自然に平坦であり、過去に大きく削平を受けていることが推測された。断面観察においても、表土層はごくわずかししか観察されず、直下が赤土の地山であることが確認された。

平成21年の豪雨災害の傷跡は、3年以上経過した現在でもその姿を留めている場所が多い。犠牲になられた方々のご冥福を心よりお祈りするとともに、この災害により学んだことを風化させることなく後世に繋ぎたいと思う。



写真 86 被災の様相 (南から)



写真 87 復旧工事の様相 (南から)

14. 人文学部外灯設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内N-21区

調査面積 約10㎡

調査期間 平成21年6月11日

調査担当 横山成己

調査結果 人文学部校舎北東側中庭にて外灯設置工事が計画された(図34)ことを受け、工事中の立会調査を実施することが決定された(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会※平成21年3月18日開催にて承認)。

工事では、外灯基礎部分の掘削とともに電気線埋設工事も計画されていたが、電気線の埋設に関しては掘削深度が浅く、造成土内に止まることが明確であったため、外灯基礎掘削部分にのみ立会調査を実施した(写真88)。

掘削部の断面精査の結果、掘削地の層序は①0.02mの表土(芝生)、②0.7mの造成土、③0.2mの旧耕土、④0.1m以上の旧床土であることが確認された(写真89)。また、④の旧耕土内から土師器の小片が出土している。

人文学部周辺は造成土が厚く、過去にも旧耕土・旧床土は確認されているものの、下位堆積層は河川堆積土であることが多く、安定的な地山面から遺構が確認されていない状況にある。吉田遺跡内では埋蔵文化財が希薄な地点なのであろうが、当調査で旧耕土から土師器が出土していることから見ても、遺構・遺物の存在を完全否定はできない。今後とも継続的な調査が必要であろう。



図 34 調査区位置図



写真 88 調査地点遠景 (南東から)



写真 89 調査区土層断面 (東から)

15. 人文学部西側アプローチ改修工事に伴う立会調査



調査地区 吉田構内M-20区

調査面積 約750㎡

調査期間 平成22年2月16日

調査担当 横山成己

調査結果 吉田構内人文学部北側の校舎アプローチ施設に対し、改修工事が計画された。当開発事業は、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会に提出されていたが、工事規模および工事期間が未確定であったため、埋蔵文化財保護対応未定として保留した計画である。平成21年11月に至り、工事規模および工程が確定したことを受け、管轄自治体の指導の下、当館館長、副館長、館員の協議により、掘削深度の深い工事地点(図35)に対し立会調査を実施することが決定された。

工事立会を行ったのは、擁壁工事が行われる幅1.5m、全長5mの南北掘削ルートである。掘削部東壁で断面精査を実施した結果、層序は①0.45mの表土、②0.65mの造成土、③0.23m以上の灰オリーブ色(5Y5/2)粘質土であることが確認された(図36・写真90)。

③の灰オリーブ粘質土は、土質から旧床土と見られるが、遺物は発見できなかった。

結果として、前記した人文学部外灯設置工事に伴う立会調査とほぼ同等の断面調査成果を得ることとなった。人文学部周辺の旧地形は未だ不明確な面が多く、西に隣接する経済学部敷地との間にある1.5m以上の段差も、本学統合移転時の造成だけでは説明できない部分もある。人文学部校舎および経済学部の一部校舎には未だ改修工事が実施されていないため、改修工事時に掘削が行われる場合には、地下の様相を確認する必要がある。

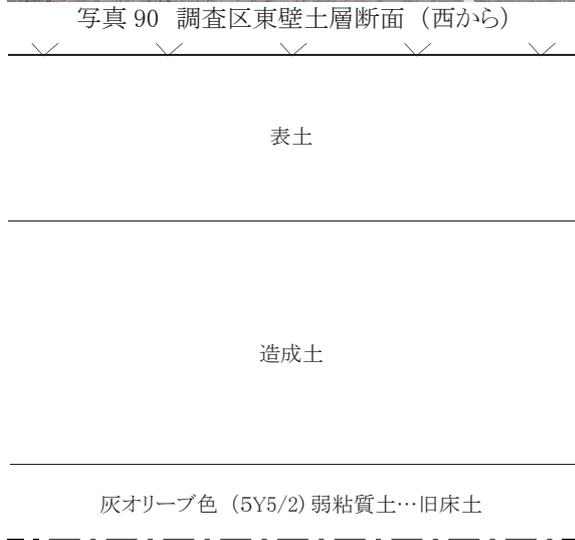


図 36 土層断面模式図 (S=1/20)

16. 教育学部研究実験A棟改修電気設備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内K-18区

調査面積 約40㎡

調査期間 平成21年12月28日

調査担当 横山成己

調査結果 平成21年度、教育学部研究実験A棟の改修工事が実施されるに伴い、開発域に対し予備発掘調査と立会調査が実施された(調査成果は本書所収)。その後、工事途中にメディア基盤センター棟と教育学部校舎の間に電気設備工事が追加されることが計画され、平成21年度第9回埋蔵文化財資料館専門委員会の審議により、立会調査の実施が決定された(平成21年9月7日開催メール審議)。

立会調査では、工事掘削終了後に土層断面精査を行った。以下で確認した3地点の層序を報告する(図37)。

A地点:①0.05mのアスファルト、②0.25mの碎石、③0.2mの砂、④0.2m以上の造成土

B地点:①0.05mのインターロッキング、②0.25mの砂、③0.15mの黒褐色粘質土(旧耕土)、④0.25m以上の灰オリーブ粘質土(旧床土)(写真92)

C地点:①0.25mの真砂、②0.05mの黒褐色粘質土(旧耕土)、③0.15mの暗褐色粘質土(旧床土)、④0.03mの暗黒褐色粘質土(旧耕土)、⑤0.22mの灰オリーブ粘質土(旧床土)、⑥褐色砂礫(河川堆積)、⑦オリーブ色細砂礫(河川堆積)、⑧褐色砂礫(河川堆積)、⑨オリーブ色シ細砂礫(河川堆積)※⑥～⑨で0.3mの堆積

C地点にて確認された河川堆積は、現メディア基盤センター棟新営工事に伴う発掘調査にて検出された縄文時代河川に繋がるものと考えられるが、出土遺物は検出されていない。

【註】

1) 河村吉行(1988)「吉田構内教養部複合棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅶ』,山口



図 37 調査区位置図



写真 91 C 地点南壁土層断面 (北から)



写真 92 B 地点東壁土層断面 (南西から)

17. 理学部ソーラー外灯設置工事に伴う立会調査



図38 調査区位置図

調査地区 吉田構内O-20区

調査面積 約0.3㎡

調査期間 平成21年10月21日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田構内の理学部講義棟南側に位置する駐車場周辺において、照明が少なく夜間の歩行が危険であることから、ソーラー外灯の設置工事が2箇所(A・B地点)で計画された。調査区の北側に隣接する理学部講義棟敷地では昭和58年度に立会調査が行われたが、遺構・遺物は確認されていない。しかし、今回の工事による掘削深度は約90cmと深いこと、現地形において理学部講義棟より一段高所に立地し、地下の状況が異なる可能性があることから立会調査を実施することになった。

調査の結果、A地点は現地表下約90cmまで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。B地点は現地表下約64cmまでが造成土、約64～90cmが地山である明黄褐色(10YR6/8)シルトであった。また、両地点から遺物は出土しなかった。

A・B地点の状況から駐車場の大半は大規模な盛土により造成されたと考えられるが、今回の調査面積は狭小であるため、地下の状況は不明である。このため、今後の開発工事においても埋蔵文化財の保護に注意を払う必要がある。



写真93 A地点土層断面(西から)



写真94 B地点土層断面(南から)

【註】

- 1) 河村吉行(1985)「第9章第1節1 理学部大学院校舎および付随工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅲ』,山口

18. 農学部インターロッキング設置工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内P-17区

調査面積 約9㎡

調査期間 平成22年3月3日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田構内の連合獣医学科棟玄関北側敷地においてインターロッキング設置工事及び排水管の敷設工事が行われることになった。連合獣医学科棟敷地については、平成4年度に発掘調査が行われ、縄文時代の河川跡が検出されている^{註1}。今回調査区の南半部は平成4年度の調査区と重複するが、北半部については調査区外にあたるため、排水管新設ルートについて立会調査をおこなった。

掘削工事は幅80～90cm、長さ12mの範囲について、現地表下約30～42cmまで行われたが、すべて造成土の範囲内であり、埋蔵文化財に支障はなかった。

連合獣医学科棟敷地で検出された縄文時代河川跡は北から南へ流れていたことが判明しているが、東肩が検出されておらず、その範囲については不明である。このため、調査区周辺においては、今後の開発計画において慎重な対応が求められる。

【註】

- 1) 豆谷和之(1994)「第2章 吉田構内農学部連合獣医学科棟新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XII』,山口



図39 調査区位置図



写真95 調査区全景(北から)



写真96 調査区土層断面(南東から)

19. 農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う立会調査



図 40 調査区位置図

調査地区 吉田構内S-19・20区

調査面積 154m²

調査期間 平成21年5月28日～12月1日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯と経過(図40、写真97・98)

平成20年度に実施した動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査では、動物医療センター北側に新規建設される建物周域(第1調査区)と、動物医療センター西側に計画された浄化槽設置部(第2調査区)を調査対象範囲とした。第1調査区では室町時代に形成された集落跡を、第2調査区では墨書土器や木製品をはじめ古代の遺物を多量に包含する埋没谷^{註1}を検出している。

平成21年度は、既設建物の改修工事とともに設置された浄化槽への設備工事が実施される予定であるため、土地の新規掘削部分に対し立会調査を実施することとなった。新規掘削面積は154m²と広域であり、工事期間も長期に及んだ。立会調査は平成21年5月28日より着手し、同年12月1日まで計19回実施した。

調査の結果、動物医療センター北側配管ルートにおいて複数のピット等遺構を確認しているが、本稿では重大な成果が得られた浄化槽接続部分配管布設工事における立会調査に限り報告を行うこととする。

【註】

1) 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報-平成20年度-』,山口

(2) 基本層序(図41、写真99～104)

平成20年度に実施した本発掘調査により、当地の基本層序は、第1層:造成土・砕石等(層厚約0.6m)、第2層:黄褐色(2.5Y5/3)粘質土…遺物包含層1(層厚約0.3m)、第3層:褐灰色(10YR4/1)に褐色(10YR4/4)が混ざる粘質土…遺物包含層2(層厚0.1



写真 97 平成 20 年度調査区谷埋土検出状況(東から)



写真 98 平成 20 年度調査区谷埋土土層断面(南西から)

吉田構内(吉田遺跡)の調査

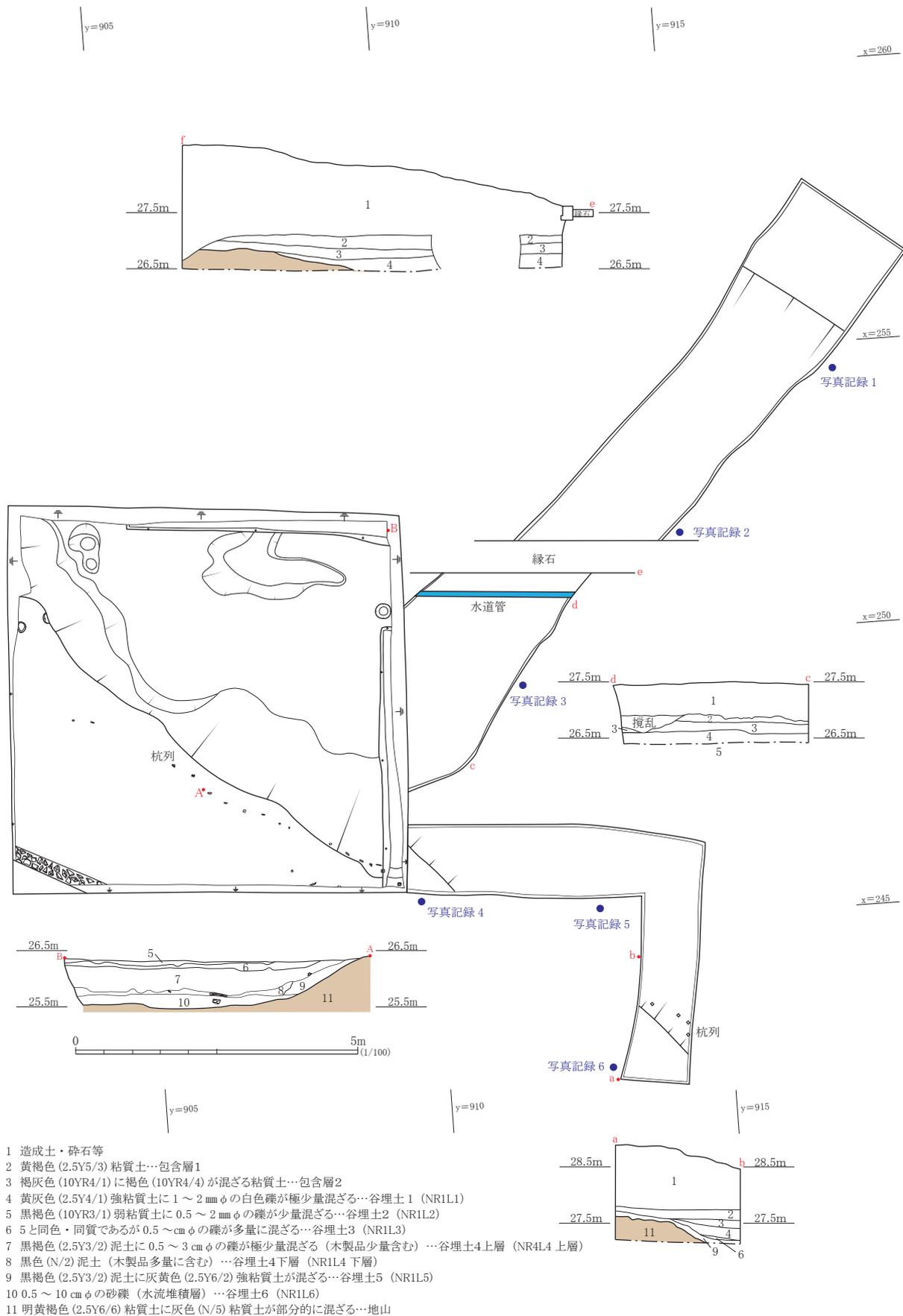


図 41 平成 20 年度調査区と平成 21 年度立会調査区平面図・断面図



写真 99 写真記録1土層断面 (北から)



写真 100 写真記録2土層断面 (北西から)



写真 101 写真記録3土層断面 (北西から)



写真 102 写真記録4土層断面 (北東から)



写真 103 写真記録5土層断面 (北西から)



写真 104 写真記録6土層断面 (北から)

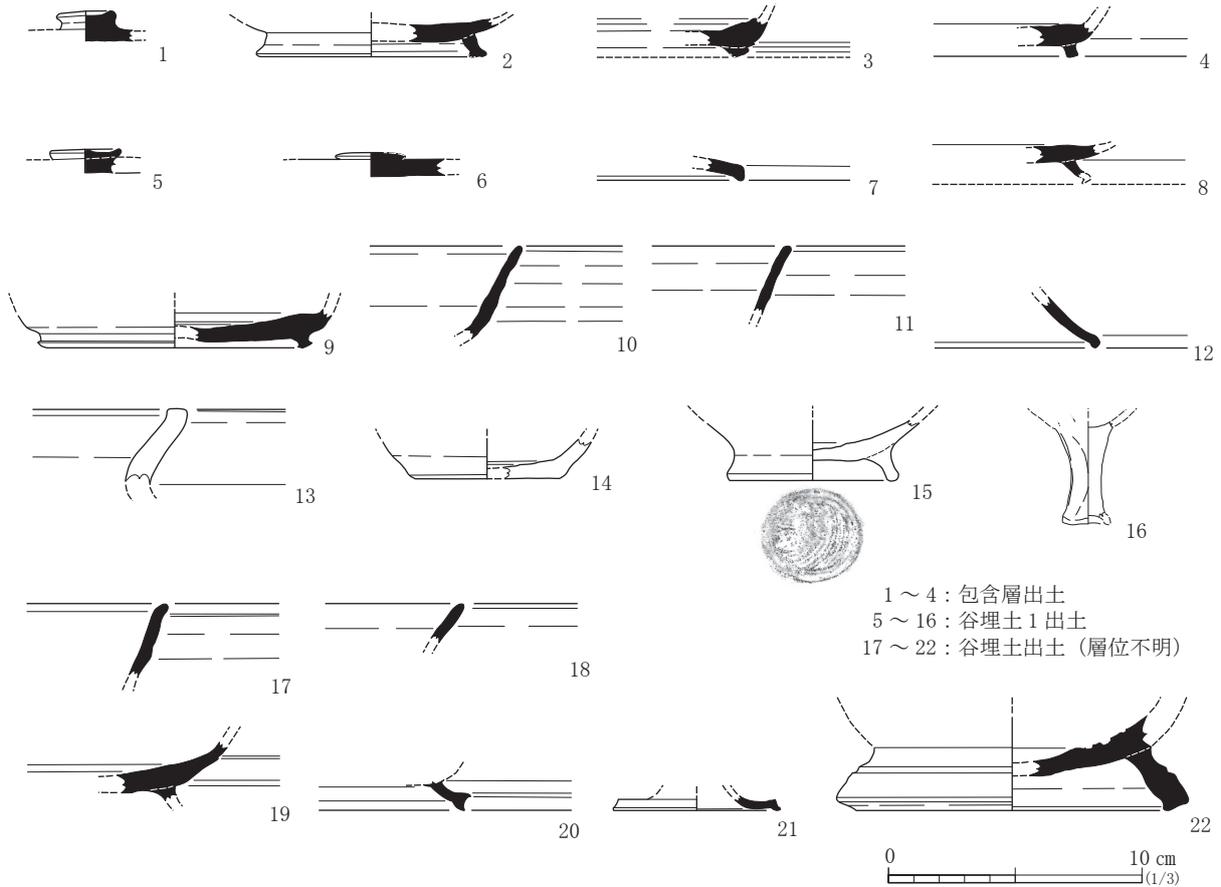


図42 出土土器実測図

～0.25m)、第4層:明黄褐色(2.5Y6/6)粘質土に灰色(N5/)が部分的に混ざる…地山、であることが確認されている。また、調査区内において地山が北東方向に約30度の傾斜をもって降下しており、かつて谷筋であったことが判明している。肩部から深さ約1mで谷底を迎え、埋積した土は6層に分層される(NR1L1～6)。この度の立会調査においても、この基本層序は追認されている。

(3) 遺構(図41、写真99～104)

今回の立会調査における最大の成果は、平成21年度第2調査区にて確認された谷左肩部と対応する右肩部が確認されたことである。

谷(NR1)(図41、写真99～104)

浄化槽接続南西－北東ルートにおいて、谷の右肩部を検出した。掘削は谷埋土第1層(NR1L1)に止まり、南西部において第2層(NR1L2)上面を検出している。右肩部からの落ち込み傾斜は左肩部に比して緩やかであり、そのためか左肩部に見られた土留め施設と見られる杭(矢板)列は確認されていない。今回の調査結果により、当地における谷幅が肩部において12.5mを測ることが確認された。

また、浄化槽接続西－東・北－南L字形ルートにおいて、谷左肩の延長部を検出した。谷肩部は直線的に南東方向に延びており、平成20年度第2調査区同様、肩部に杭列が検出された(写真104)。

(4) 遺物(図42、写真105・106、表6)

遺物包含層および谷埋土から遺物が出土している。遺物包含層出土資料については、現地において



写真 105 出土土器①

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 106 出土土器②

表6 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	包含層	須恵器 坏蓋	つまみ	つまみ径1.2		①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	密:0.2~1.5mmφの砂粒やや 多く混ざる	
2	包含層	須恵器 高台付坏	底部	高台径(9.1)		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密:0.3~1mmφの砂粒極少 量混ざる	高台内端欠 失
3	包含層	須恵器 高台付坏	底部			①②灰色(N7/)	密:0.2~1mmφの砂粒やや 多く混ざる	高台内端欠 失
4	包含層	須恵器 高台付坏	底部			①②灰色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒やや 多く混ざる	
5	谷埋土1	須恵器 坏蓋	つまみ	つまみ径2.8		①灰白色(N7/) ②灰色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量混ざる	
6	谷埋土1	須恵器 坏蓋	つまみ	つまみ径2.8		①灰色(N6/) ②灰白色(N7/)	密:0.3~1mmφの砂粒少量 混ざる	
7	谷埋土1	須恵器 坏蓋	口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密:0.2~1.5mmφの砂粒少量 混ざる	
8	谷埋土1	須恵器 高台付坏	底部			①②灰白色(N8/)	精緻	高台端部欠 失
9	谷埋土1	須恵器 高台付坏	底部	高台径(10.8)		①②灰色(N6/)	密:0.1~0.5mmφの砂粒少量 混ざる	
10	谷埋土1	須恵器 坏	口縁~ 体部			①②灰色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒少量 混ざる	
11	谷埋土1	須恵器 坏	口縁~ 体部			①②灰色(N5/)	密:0.2~1mmφの砂粒やや 多く混ざる	
12	谷埋土1	須恵器 高坏	裾部			①灰色(5Y6/1) ②灰白色(N7/)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量混ざる	
13	谷埋土1	土師器 甕	口縁部			①浅黄色(2.5Y7/3) ②にぶい黄色(2.5Y6/3)	密:0.3~1mmφの砂粒少量 混ざる	
14	谷埋土1	土師器 坏	底部	②(5.8)		①灰白色(2.5Y8/2) ②灰白色(2.5Y8/1)	密:0.2~2mmφの砂粒少量 混ざる	
15	谷埋土1	土師器 高台付坏	底部			①浅黄色(2.5Y7/3) ②灰黄色(2.5Y6/2)	密:0.2~1mmφの砂粒極少 量混ざる	底部糸切り
16	谷埋土1	美濃ヶ浜式製塩土器	脚部	残高4.1 脚裾部径(1.9)		①明赤褐色(2.5YR5/6) ②にぶい橙色(2.5YR6/4)	やや粗:0.2~2.5mmφの砂粒 多く混ざる	
17	谷埋土	須恵器 坏	口縁~ 体部			①②灰白色(N7/)	密:0.2~0.5mmφの砂粒極少 量混ざる	
18	谷埋土	須恵器 坏	口縁部			①灰色(N5/) ②灰色(N6/)	密:0.2~1mmφの砂粒多く混 ざる	
19	谷埋土	須恵器 高台付坏	底~ 体部			①灰白色(N7/) ②灰白色(N8/)	精緻	
20	谷埋土	須恵器 高台付坏	高台			①②灰白色(N7/)	精緻	ゆがみ大
21	谷埋土	須恵器 高坏	裾部	②(6.6)		①②灰白色(N7/)	精緻	
22	谷埋土	須恵器 壺	底部	高台径(13.9)		①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)	密:0.1~1mmφの砂粒少量 混ざる	風化激しい

遺物の所属層を厳密に分別することは不可能であった。谷埋土出土資料についても、南西-北東ルートでは谷埋土1(NR1L1)出土であることを確定できたが、西-東・北-南L字形ルートでは所属層を確定できていない。

遺物包含層

図化可能資料は須恵器に限られる。1は須恵器坏蓋天井部片。径2.3cmのボタン状つまみを有する。2~4は高台付坏底部片。2は高台端部の大部分を欠失する破片であるため、高台接合部の径で反転復元を行った。底部外端よりやや内側に高台が張り付く。長く外方に開く高台の両端はつまみ出されるが、内端部は欠失している。下端全面で接地するものと思われる。復元高台外端径は9.1cmを測る。3は底部外端に幅太で低い高台が付く。高台内端部で接地するが、当資料は内端部をわずかに欠失する。4は底部外端やや内側に断面長方形の細い高台が付く。高台は内端部で接地する。

谷埋土

5~16は南西-北東ルートの谷埋土1(NR1L1)出土資料である。5~7は須恵器坏蓋。5は天井部片であり、中央部が突起するボタン状つまみを有する。つまみ径は2.65~2.8cm。6も天井部片。径2.8cm、

高さ0.25cmの扁平なつまみが付く。7は口縁部片。扁平な蓋の口縁部であり、端部をわずかに下垂させる。8～11は須恵器坏。8は高台付坏底部片。底部外端の内側に、外方に長く張り出す高台が付く。高台端部は欠失する。胎土は精緻であり焼成も極めて良好である。吉田遺跡では小型高坏、坏G類などに同様な特徴を持つ須恵器が多い。9も高台付坏底部片。底部外端のやや内側に低い高台が付く。高台内外面を強くナデることにより、高台両端部が外方に突出する。復元高台外端径は10.8cmを測る。10は口縁一体部片。体部下位より直線的に口縁に開く。口縁端部は丸く収める。全面回転ナデ調整が施されるが、ロクロ水引き痕が明瞭に残る。11も口縁一体部片。10と同様な特徴を有するが、やや器壁が薄い。12は須恵器高坏裾部片か。高坏であれば屈曲の少ない裾部であり、吉田遺跡では稀な器形である。外面全面に灰が被る。13は土師器甕口縁部片。器壁が厚い個体であり、大型品と見られる。外反する口縁は端部で直立気味に立ち上がる。上端はナデにより面を取り、内端部をわずかに肥厚させる。14は土師器坏底部。平底の底部であり、体部はやや内湾して立ち上がる。復元底部径は5.8cmを測る。15は土師器高台付坏底部片。底部外面には明瞭に糸切り痕が残る。高台は長く外方に開き、端部は丸く収めている。内外面とも風化が激しいが、底部内面は渦巻き状に指ナデが施されている。16は美濃ヶ浜式製塩土器脚部片。脚部は細く裾部も大きく開かない、美濃ヶ浜式製塩土器の末期形態のものである。脚部中位径1.15cm、復元裾部径1.9cmを測る。

17～22は西－東・北－南L字形ルートに検出した谷埋土から出土した資料である。出土層は確認できていない。17は須恵器坏口縁部片。口縁端部は丸く収める。18も須恵器坏と見られる。口縁一体部片であり、直線的に開く体部から、口縁部をわずかに外反させる。体部外面にはロクロ水引き痕が明瞭に残る。19は須恵器高台付坏底部片。底部外端のやや内側に高台が付くが、大半を欠失している。丁寧な作りであり、胎土・焼成に8と同様な特徴を有する。20は須恵器坏高台片。底部との接合部で剥離している。長く外反する高台であるが、歪みが大きい。端部はU字状に拡張する。胎土・焼成に8・19と同様な特徴を有する。21は須恵器小型高坏裾部片。強く外反する裾部であり、端部は鳥嘴状にシャープに下垂する。当資料も胎土は精緻であり、焼成も極めて良好である。22は須恵器壺類底部片。丸底の底部外端に長く直線的に張り出す高台が付く。高台外面には凹線が1条巡らされている。外端および内面のナデにより突出した内端部で接地する。底部内面には、高台接合時のものと見られるヘラ(櫛)押し痕が多数見られる。

(5)まとめ

平成21年度に実施した立会調査においては、前年度に実施した本発掘調査成果を補足する結果を得た。当地点における埋没谷の肩部幅が約12.5mを測ることが明らかとなるとともに、右肩からの落ち込み傾斜が緩やかであることが再確認された。谷埋土上層から出土した遺物は多時期に及ぶものであることも再度明らかとなり、この成果から、平成14年度に実施された農学部解剖実習棟プレハブ校舎新営に伴う本発掘調査において検出された河川1右岸^{註1}が、当地点で検出された右肩部に合致することがほぼ確実となった。河川1右岸の北西には多数の掘立柱建物跡や柵列が検出されている。動物医療センター周囲にも同様の状況が予測されるため、周辺地における工事等地下の掘削を伴う事業計画に対しては、慎重な対応が必要となる。

【註】

1) 田畑直彦(2002)「平成14年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口

20. 農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内Q-15・16区、R・S・T・U・V-15区 調査面積 96㎡
 調査期間 平成21年11月16日～27日 調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯(図43、写真107)

吉田構内最東部に位置する農学部附属農場水田において、暗渠排水工事が計画された。棚田状に東から西に5枚形成されている水田においては、平成9年に実施した農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査にて、溝状遺構や自然河川を検出し、遺物としては土師器、須恵器、製塩土器、石鏃などの出土を見ている。また、平成17年に実施した日本ペトロロジー学会水田土壌の断面調査に伴う立会調査でも自然河川を確認しており、東から西に降下する水田域の一部は、過去において河道であったことが判明している。

この度の工事計画は、水田域北端部と最西端部にコの字状に新規の暗渠を入れるため幅約0.4mで平均0.7～0.8mの掘削を行うというものであった。既往調査の成果から、掘削域で埋蔵文化財が検出される可能性は高いと判断されたため、立会調査を実施することが提案され、承認された(平成21年度第7回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年8月26日開催メール審議)。

【註】

- 1) 田畑直彦(2004)「農学部バイオ環境制御施設新営に伴う試掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 2) 田畑直彦(2007)「日本ペトロロジー学会水田土壌の断面調査に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報—平成17年度—』,山口

(2) 基本層序(図44・写真107～112)

今回の調査では、棚田状水田を西から東へ「第1区～第5区」と命名し、各区の記録を行った。なお立会調査前にすでに現耕土の大半は除去されていた(写真107)。各区の基本層序は以下の通りである。



図43 調査区位置図

第1区南側東西管路(図44、写真108)

①耕土(層厚0.2~0.4m)、②床土(層厚0.1~0.2m)、③暗黄灰色砂礫(層厚0.1m※調査区西部にのみ確認)、④黒褐色シルト(層厚0.1~0.2m)…遺物包含層、⑤明黄灰色シルト(層厚0.1~0.2m※調査区東部にのみ確認)、⑥青灰色シルト(層厚0.1~0.25m以上※調査区東部にのみ確認)、⑦青灰色砂礫(層厚0.2m以上)

第1区南北管路(図44、写真109・110)

①床土(層厚0.2~0.45m)、②黒褐色シルト(層厚0.1~0.25m※調査区南半部にのみ確認)…遺物包含層、③青灰色シルト(層厚0.1~0.35m※調査区南半部にのみ確認)、⑤明黄灰色シルト(層厚0.05~0.25m※調査区北半部にのみ確認)、⑥青灰色砂礫(0.6m以上)…須恵器含む

第1-2区境界部東西管路(図44、写真111)

①盛土・耕土(層厚0.3~0.8m)、②青灰色砂礫(層厚0.1~0.3m)、③黒褐色粘質土(層厚0.35m)…遺物包含層か、④明青灰色粘質土(層厚0.3m以上)…地山

第3区東西管路(図44)

①盛土(層厚0.1~0.6m)、②浅黄色粘土・橙色岩盤風化層…地山

第4区東西管路(図44、写真112)

①盛土(層厚0.45~0.7m)、橙色岩盤風化層…地山

第5区東西管路(図44)

①盛土(層厚0.4~0.7m)、橙色岩盤風化層…地山

上に見るように、第3区以東は盛土直下が岩盤風化層(地山)である。これは、水田造営時に北方に存する東から西に張り出す丘陵の南縁辺部を削平した結果と見られる。また、第1-2区境界部東西管路以東においては、盛土下に枝木を用いた簡便な暗渠を検出した。吉田構内各地に見られる暗渠であり、近代以降のものと思われる。

明確な遺物包含層は、第1区にのみ確認された。西に隣接する農学部農業観測実験施設敷地^{註1}では遺物包含層とともに掘立柱建物跡と見られる土壌層が検出されており、これと関連するものであろう。この包含層から出土する遺物は、7世紀以降の遺物が主体となる。また第1区南北管路断面に見るように遺物包含層は青灰色砂礫層上に形成されているが、この青灰色砂礫層は明確に河川堆積層であり、層中からは須恵器甕体部片が出土している。

【註】

1) 河村吉行(1992)「吉田構内農学部農業観測実験施設新営伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口

(3) 遺物(図45、写真113・114・表7)

多数の遺物が出土しているが、全て第1区の遺物包含層、河川堆積層、床土から出土している。表採資料も第1区排土中のものである。

遺物包含層

1~3は須恵器高坏。1は坏底~脚部片である。坏底部外面には段が形成されており、脚部接合時に生じたものか内面中央部が突起している。脚部のほぼ中位に沈線が巡らされるが、始点と終点が合致していない。脚部中位から下位にかけて幅5.5mの回転ヘラナデが施されている。脚内面には左上-右下方向に絞り痕が見られる。裾部は欠失するが、焼き歪みが生じている。2も1とほぼ同型であるが、坏底



写真 107 調査前全景 (北東から)



写真 108 第1区南側東西管路北壁土層断面 (南西から)



写真 109 第1区南北管路西壁土層断面 (南東から)



写真 110 第1区南北管路西壁土層断面 (南東から)



写真 111 第1-2区東西管路北壁土層断面 (南西から)



写真 112 第4区東西管路北壁土層断面 (南から)

内面は平坦であり、脚部の回転ヘラナデは幅4.5mmとやや狭く、脚上位にのみ施されている。3は坏底部。脚部は剥離している。2と異なり坏底外面に段を形成せず、ゆるやかに開きながら立ち上がる。坏接合部における脚部径は2.8cmであり、1・2同様の脚部が付くものと思われる。4は須恵器底部片。器壁の厚みから坏底部と思われるが、平底の底部から大きく開きながら体部に立ち上がる。復元底部径7.0cmを測る。

5～8は土師器甕。いずれも小片であり、反転復元不能である。5は口縁一体部片である。短く外反する口縁をは端部を丸く収めている。体部は膨らみが少なく、長胴形を呈すものと思われる。口縁内外面には横ナデ、体部外面は風化が激しいが縦ハケが観察される。6は口縁部片。大きく外反する口縁であり、端部は丸く収める。1に比して器壁が分厚い。内面調整は口縁部には横ナデ、頸部には縦ハケが施されている。外面は部分的に縦ハケを施した後横ナデを行っている。7も口縁部片。頸部から強く屈曲させて口縁を形成する。口縁はわずかに内湾させており、端部は尖り気味に丸く収める。内外面に横ナデを施している。8も短く外反する口縁部片。端部を丸く収めている。内外面に横ナデを施しているが、内面にはヘラ記号らしき斜線が見られる。

河川堆積層

9は須恵器甕体部片。甕体部上位の破片と見られ、外面には平行叩き後カキ目が施されている。内面には同心円当て具痕が明瞭に残っている。河川堆積土出土品であるが、器面はあまり摩耗しておらず、破断面もシャープである。

床土

10は須恵器坏蓋口縁部片。短いかえりの付く口縁部片で、器壁が薄く比較的シャープなつくりである。天井部は欠失するが、ドーム状に膨らむものと思われる。内面のみ回転ナデ調整が見られ、外面は直線的に指ナデが施されている。11は須恵器高坏の裾部片。小片のため裾部径は復元できないが、小型高坏である。裾部は強く屈曲し、端部を鋭く鳥嘴状に下垂させる。胎土は精緻であり、焼成も良好である。12は土師器高坏脚部片。坏との接合部で剥離している。裾端部をわずかに欠失しているが、脚部高4.8cm、復元裾部径8.8cm、脚上端部径2.8cmを測る。色調は浅黄色～灰白色を呈しており、胎土も精選されていることから須恵器の焼成不良品である可能性を残す。13は土師器皿口縁一底部片。口縁から反転復元を行った。底部の大半を欠失するが、丸底に近い平底から緩やかに内湾しつつ大きく開き口縁に立ち上がる。口縁端部は丸く収める。内面底部付近に左下～右上方向の放射状暗文が施されているが、暗文の長さは約3.5cmと短い。内面は回転ナデ調整が施されている。外面は風化が著しく調整痕が観察できない。復元口径23.0cm、復元底部径6.0cm、残高4.1cmを測る。

表採

14は須恵器高坏脚部片。坏部と裾部を欠失する。全面摩耗しており、ほぼ原面を留めていない。脚部上端径は2.5cmを測り、細長の脚形は吉田遺跡出土須恵器高坏としては異色である。内面には絞り痕が見られる。

(4)まとめ

吉田構内南東部に検出される埋没谷の須恵器包含状況を見ると、吉田遺跡の古代初期(7世紀後半から8世紀前半)は、高坏が占める比率が非常に高いように感じられる^{註1}。本調査において遺物包含層より出土した遺物にもその傾向が見られるが、吉田遺跡では当該時期の遺構が未だ明確でないため明言を避けている状態にある。西に隣接する農学部農業観測実験施設敷地の調査成果からも、周辺丘陵上に

吉田構内(吉田遺跡)の調査

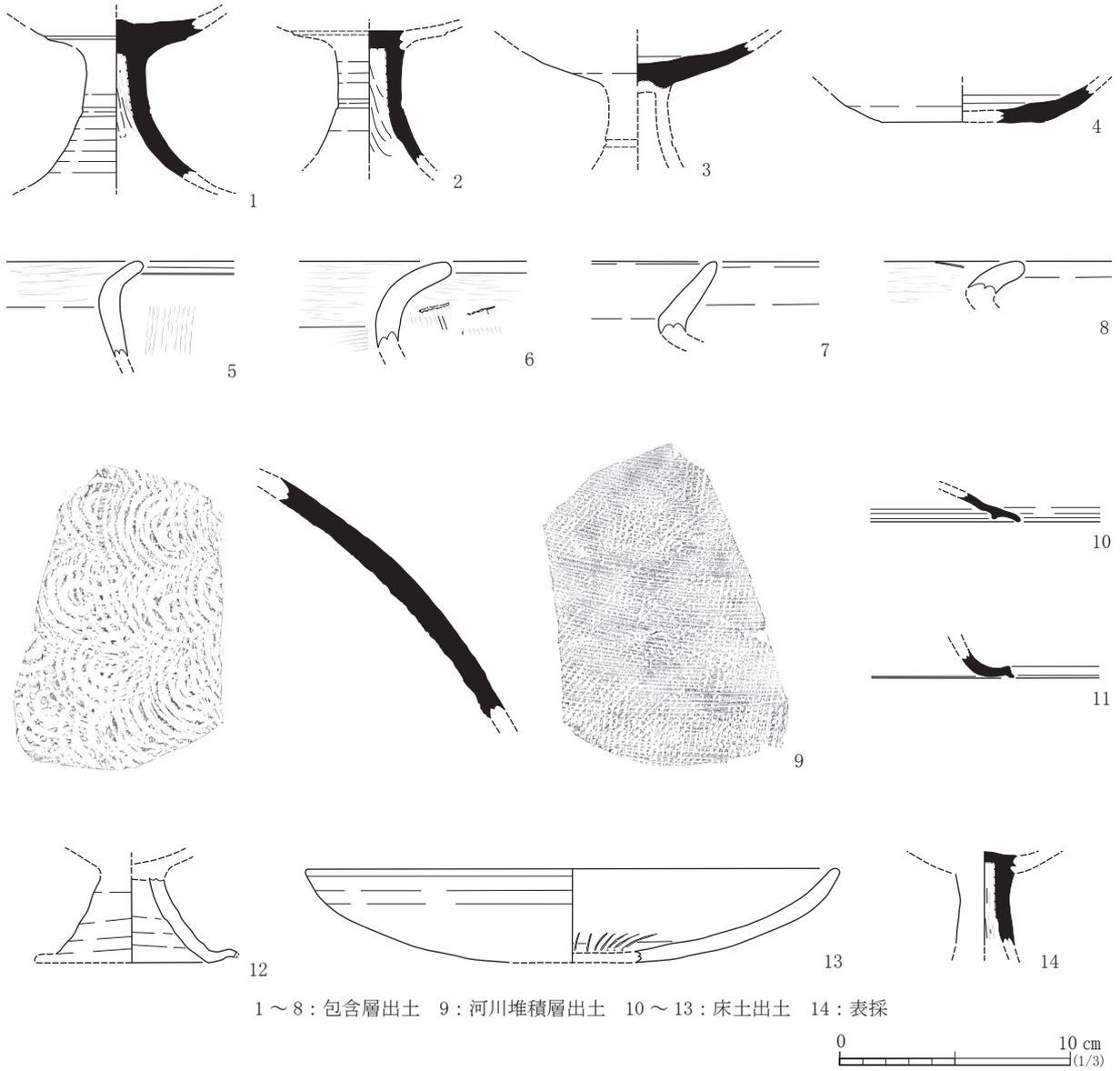


図 45 出土土器実測図



写真 113 出土土器①

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 114 出土土器②

表7 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	第1区 遺物包含層	須恵器 高坏	脚～ 坏部	脚沈線部径2.95	①灰色(N5/) ②灰白色(N7/)		密:0.2～0.5mmφの砂粒極 少量混ざる	裾部にゆが み
2	第1区 遺物包含層	須恵器 高坏	脚部	脚沈線部径2.8	①灰色(N5/) ②灰色(N4/)		密:0.2～1mmφの砂粒極少 量混ざる	
3	第1区 遺物包含層	須恵器 高坏	坏部	坏脚接合部径 2.8	①灰白色(2.5Y7/1～8/1) ②浅黄色(2.5Y8/3)		密:0.3～1.5mmφの砂粒少 量多く混ざる	焼成やや不 良
4	第1区 遺物包含層	須恵器 坏	底～ 部部	②(7.0)	①②灰白色(N7/)		密:0.2～1.5mmφの砂粒極 少量混ざる	
5	第1区 遺物包含層	土師器 甕	口縁部		①にぶい赤褐色(5YR5/4) ②黒色(2.5Y2/1)		やや粗:0.2～2mmφの砂粒 多く混ざる	風化激しい
6	第1区 遺物包含層	土師器 甕	口縁部		①②にぶい黄橙色 (10YR7/2)		やや粗:0.3～3mmφの砂粒 少量混ざる	
7	第1区 遺物包含層	土師器 甕	口縁部		①にぶい黄橙色(7.5YR7/4) ②にぶい黄橙色(7.5YR7/3)		密:0.3～1.5mmφの砂粒少 量混ざる	
8	第1区 遺物包含層	土師器 甕	口縁部		①にぶい黄橙色(10YR6/3) ②灰黄褐色(10YR6/2)		密:0.2～2mmφの砂粒多く 混ざる	口縁内面 ヘラ記号
9	第1区 青灰色砂礫	須恵器 甕	体部		①灰白色(5Y7/1) ②灰白色(N7/)		密:0.2～0.5mmφの砂粒極 少量混ざる	
10	第1区 床土	須恵器 坏蓋	口縁部		①灰白色(N7/) ②灰色(N5/)		密:0.2～1mmφの砂粒極少 量混ざる	
11	第1区 床土	須恵器 高坏	裾部		①灰白色(N8/) ②灰色(N6/)		精緻	外面灰被る
12	第1区 床土	土師器 高坏	脚部	裾部径(8.8)	①灰白色(2.5Y8/2) ②浅黄色(2.5Y8/3)		密:0.3～1.5mmφの砂粒少 量混ざる	胎土は須恵 器質
13	第1区 床土	土師器 皿	ほぼ 完形	①(23.0)②(6.0) ③4.1	①灰白色(7.5YR8/2) ②にぶい橙色(7.5YR7/4)		密:0.3～5mmφの砂粒少量 混ざる	内面に放射 線状暗文
14	第1区 表採	須恵器 高坏	底部		①②灰白色(N7/)		密:0.3～1mmφの砂粒少量 混ざる	風化激しい

古代の集落跡が埋存する可能性は極めて高いと言える。調査地周辺は農学部附属農場敷地であり、吉田構内では土地の掘削を伴う開発工事から逃れてきた地帯であるが、構内低地部も空闲地が減少しつつある。当調査のように、小規模工事時においても地下の情報を収集すべく立会調査を実施する必要がある。

【註】

- 1) a: 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報－平成18年度－』,山口
- b: 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報－平成20年度－』,山口

21. 農学部植物工場新営工事に伴う立会調査



図 46 調査区位置図

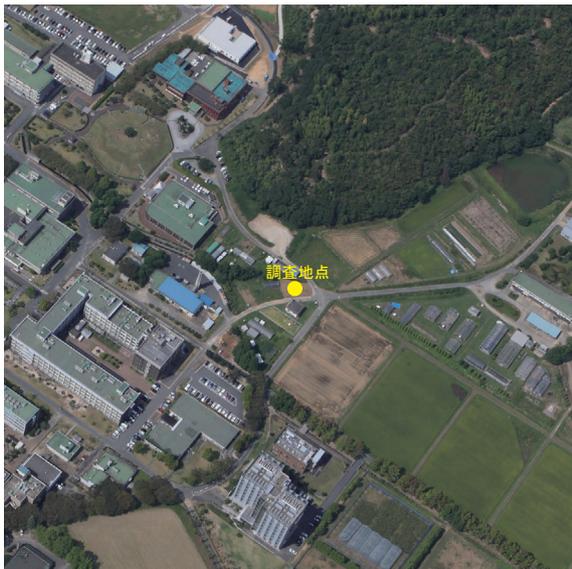


写真 115 調査地点遠景(南東から)



写真 116 調査区北西壁土層断面(東から)

□ 調査地区 吉田構内P-15区

調査面積 98㎡

調査期間 平成22年2月8日～2月10日

調査担当 横山成己 藤野好博

調査結果

(1) 調査の経緯(図46、写真115)

吉田構内東部域に立地する農学部農業観測実験施設の北西隣接地において、農学部により植物工場の新営が計画された。農学部農業観測実験施設新営に伴う発掘調査では、古代の掘立柱建物跡柱穴と見られる土壌列が検出されている^{註1}。新規計画建物が恒久的施設であれば予備発掘調査を実施し、地下の様相を確認すべき地点であるが、植物工場がプレハブ施設として計画されていること、10年をめどに撤去される予定であること、計画域に盛土を行うことなどから総合的に判断し、埋蔵文化財資料館専門委員会の審議により、建物周囲に予定されている設備工事(配管埋設)部分において工事中の立会調査を行うことが決定された(平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年7月29日開催)。

【註】

1) 河村吉行(1992)「吉田構内農学部農業観測実験施設新営に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報X』,山口

(2) 基本層序(図47・写真116)

設備工事は建物建設終了後に行われたため、敷地の表土は除去されており、代わりに盛土が施されている。現地にて確認された基本層序は以下の通りである。

- ① 盛土(層厚0.1～0.2m)
- ② 造成土(層厚0.15～0.6m以上)
- ③ 黄褐色粘質土(層厚0.1～0.25m)…旧床土
- ④ 暗褐色粘質土(層厚0.15m以上)

…遺物包含層

確認された最下層の暗褐色粘質土(遺物包含

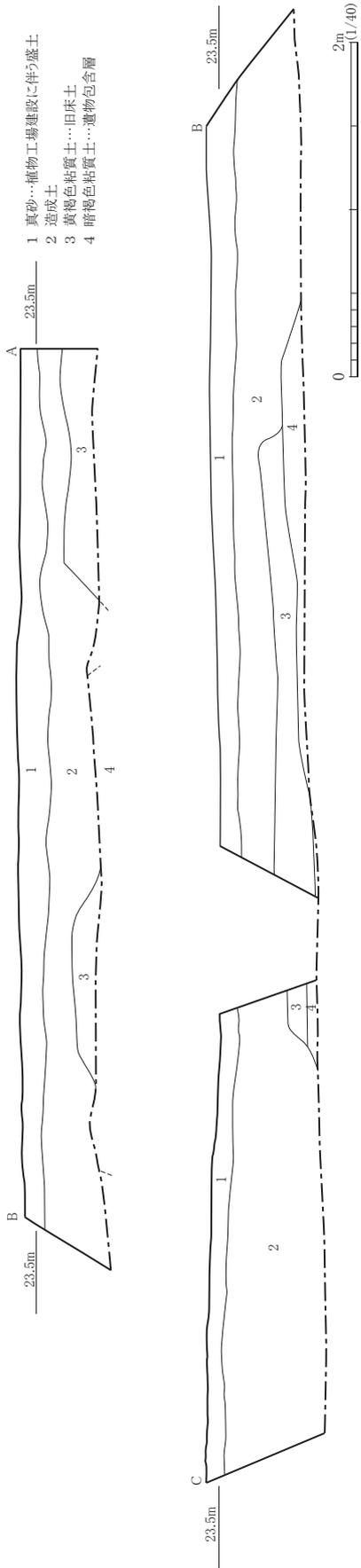
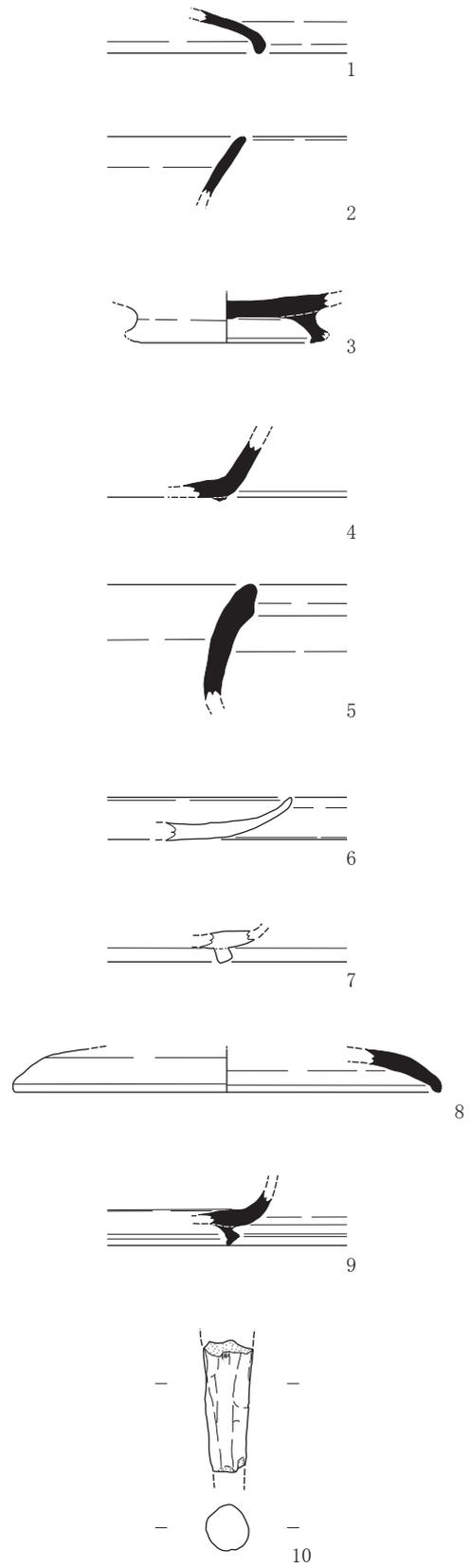


図 47 調査区断面図



1～7：包含層出土 8・9：造成土出土 10：旧床土出土

0 10 cm (1/3)

図 48 出土土器実測図

層)は、深く攪乱を受けている北東—南西管路の南西端部と南東—北西管路の北西端部以外はほぼ全域に及んでいる。農学部農業観測実験施設新営に伴う発掘調査においても遺構面(地山)上に遺物包含層が確認されていることから、植物工場敷地においても遺物包含層下に遺構が遺存している可能性は極めて高いと考えられる。

(3) 遺物(図48・写真117・表8)

遺物包含層、造成土、旧床土に遺物を確認した。

遺物包含層

1～5は須恵器。1は坏蓋口縁部片。口縁端部をやや肥厚させ下垂させる。内面には回転ナデが、外面は回転ナデ後直線的な指ナデが施されている。2は坏口縁一体部片。わずかに外反するが直線的に大きく開き、口縁に至る。口縁端部は丸く収める。内外面とも回転ナデが施される。3は高台付坏底部片。底部外端より内側に高台が付く。高台は長く外方に張り出し、端部は外端を欠失するが、内端は外方に鋭く突起している。高台内端で接地し、復元内端部径は7.0cmを測る。坏底は器壁が厚く、遺存部に明確な体部への立ち上がりは見られない。坏底内面には不定方向の直線的な指ナデが施されている。残高2.1cm。4も器壁が厚く壺類底部の可能性はあるが、ここでは坏底部片として報告しておく。平底の底部からくの字状に屈曲して体部に立ち上がる。体部下端に回転ヘラ削りが見られる他は回転ナデが施されている。体部外端付近に目状の小さな粘土塊が付いているが、意図的なものか不明である。5は甕口縁部片。ほぼ直立する口縁として図示しているが、小片であるため傾きに検討を要する。口縁外面を断面低三角形に肥厚させており、上端は丸く収める。外面には横ナデ調整が明瞭に残るが、内面調整は灰を被っているため観察できない。

6・7は土師器。6は皿の口縁—底部片。平底の底部から、内湾しつつ口縁に立ち上がるが、扁平な器形であり、器高は1.7cmを測る。底部に比して口縁部の器壁が薄く、口縁端部は尖り気味に丸く収める。焼成不良品であり、かつ風化が著しく器面調整は不明である。7は高台付坏底部片。底部外端やや内側に、断面方形の小さな高台が付く。高台は内端部で接地する。

造成土

8は須恵器坏蓋口縁—天井部片。小片であるが歪みが少なければ口径は17.8cm内外となる。器壁は肉厚であり、天井部から緩やかに内湾して口縁に降下する。端部を短く下垂させ、下端は丸く収める。口縁部内外面にのみ回転ナデが施されているようである。9は須恵器高台付坏底一体部片。底部外端の内側に細くやや長めの高台が付く。鋭くつまみ出されている高台内端で接地する。底部から体部へは屈曲気味に立ち上がっており、口縁はあまり開かないものと思われる。小片のため高台径不明。残高2.3cmを測る。

旧床土

10は瓦質土器足鍋の脚部片。両端を欠失している。器面を縦方向に丁寧指ナデしており、横断面はほぼ円形を呈する。

以上が当調査で出土した図化可能遺物の全てである。本書に所収しているが、農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査において出土した土器に比すと、時期的にやや降る資料が目につく。両調査地は距離にして20mと極めて近接するが、遺物包含層の由来地が異なる可能性を有しており、注意が必要である。

吉田構内(吉田遺跡)の調査



写真 117 出土土器

表8 出土遺物(土器)観察表

法量()は復元値

遺物 番号	遺構・ 層位	器種	部位	法量(cm) ①口径②底径③器高	色調		胎土	備考
					①外面	②内面		
1	遺物包含層	須恵器 坏蓋	口縁部		①灰白色(N7/) ②灰白色(N8/)		密:0.3~1mm φの砂粒極少量混ざる	
2	遺物包含層	須恵器 坏	口縁~ 体部		①②灰色(N6/)		密:0.2~1mm φの砂粒少量混ざる	
3	遺物包含層	須恵器 高台付坏	底部	高台内径(7.0)	①灰白色(N7/) ②灰白色(5Y7/1)		密:0.2~1mm φの砂粒極少量多く混ざる	
4	遺物包含層	須恵器 坏	底部		①灰白色(N7/) ②灰白色(N8/)		密:0.2~0.5mm φの砂粒極少量混ざる	底部に粘土塊付着
5	遺物包含層	須恵器 甕	口縁部		①灰白色(N7/) ②灰色(7.5Y6/1)		密:1~1.5mm φの砂粒少量混ざる	内面灰被る
6	遺物包含層	土師器 皿	底~ 口縁部		①②灰白色(5Y8/1)		密:0.2~0.5mm φの砂粒極少量混ざる	風化激しい
7	遺物包含層	土師器 高台付坏	底部		①灰黄色(2.5Y6/2) ②黄灰色(2.5Y6/1)		密:0.2~1mm φの砂粒多く混ざる	焼成不良
8	造成土	須恵器 坏蓋	口縁~ 天井部	①(17.8)	①②灰白色(N7/)		密:0.3~1mm φの砂粒やや多く混ざる	
9	造成土	須恵器 高台付坏	底~ 体部		①②灰白色(N7/)		密:0.1~0.5mm φの砂粒極少量混ざる	
10	旧床土	瓦質土器 足鍋	脚部		①灰色(5Y6/1)		密:0.2~0.5mm φの砂粒極少量混ざる	

(4)まとめ

既往の調査により、吉田構内の東-南東方向を取り巻く低丘陵上には、古代の遺構・遺物が密に分布することが指摘されている。また検出される掘立柱建物の配置や規模、そして出土する墨書須恵器や円面硯、製塩土器(美濃ヶ浜式・六連式)、緑釉陶器、帯金具未成品、鞆羽口などから、古代において官衛が存在した可能性が高いと推定されている。

当調査を含め、平成21年度に実施した立会調査においても、低丘陵地の地下に密に古代の遺物が包含されていることが明らかとなった。

筆者は、既往調査の出土遺物から古代官衛関連施設は吉田構内南東部から北西方向に、施設名で換言すると農学部附属動物医療センター敷地^{註1}周辺から第2学生食堂敷地^{註2}、大学会館敷地^{註3}周辺へと移動するのではないかと推測していた。しかし、当調査と農学部附属農場水田暗渠排水工事に伴う立会調査成果から考えると、同一時期における施設・集落の分布はさらに複雑であった可能性が高い。

低丘陵地に展開する農学部附属農場敷地においては、小規模の開発工事が断続的に実施されている状況にあるため、遺構の面的な確認ができていない。しかし、当調査のように狭小な範囲においても遺物包含層を確認し、堆積層に包含される遺物を綿密に精査することによって、一定程度古環境の復元は可能と考える。今後とも埋蔵文化財の保護を第一義とした調査に努めたい。

【註】

- 1) a: 横山成己・藤野好博(2010)「農学部附属家畜病院改修Ⅰ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報-平成18年度-』,山口
b: 横山成己(2012)「農学部附属動物医療センター改修Ⅲ期工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館調査研究年報-平成20年度-』,山口
- 2) 田畑直彦(2002)「平成10年度山口大学構内遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報XVI・XVII』,山口
- 3) 河村吉行(1985)「吉田構内大学会館新宮に伴う発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報III』,山口

22. 男子学生寮新営工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内M-10・11区

調査面積 1350㎡

調査期間 平成21年9月14日～平成22年1月27日

調査担当 横山成己

調査結果

吉田構内北部に立地する男子学生寮(吉田寮)の北東空閑地に、新学生寮(第2吉田寮)新営が計画された。

予定地は、姫山から南西に派生する丘陵の先端部に位置するが、現況地形から見て丘陵端部が大きく切断されていることは明瞭であり(写真118)、昭和56年度に実施された吉田構内学生部馬場整備工事に伴う立会調査においても、予定地の表土下は三群変成岩からなる岩盤となっていることが報告されている。このことから、新学生寮建設予定地^{註1}に関しては慎重工事扱いとし、新営に伴い周辺域に広く実施される設備工事に対し、工事中の立会調査を実施することが提案され、承認された(平成20年度第10回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年3月18日開催)。今回の開発工事の総掘削面積は1350㎡と広大であり、調査も長期間に及んだが、本稿では学生寮の南西域にて実施した管路埋設工事(写真119)に伴う立会調査に関し報告を行う。

掘削工事は北から南方向に実施された。調査はA～Fの6地点にて実施した(図49)。A地点の層序は①碎石(層厚0.2m)、②砂:造成土(層厚0.55m)、③赤土:造成土(層厚1.35m以上)であり(写真120)、当地点が厚く造成を受けていることが確認された。B地点においても①碎石1(層厚0.5m)、②碎石2(層厚0.4m)、黄褐色土:造成土(層厚0.8m以上)の層序が確認するに止まり(写真121)、自然堆積層や地山は検出されなかった。管路において初めて地山が検出されたのはC地点であり、①アスファルト(厚0.05m)、②碎石(層厚0.2m)、③バラス(層厚0.7m)、④真砂(層厚0.5m)、暗灰黄色粘土:地山(0.35m以上)の層序が確認された(写真122)。このC地点から南に向かい地山検出面は高度を上



図 49 調査区位置図



写真 118 調査区周辺遠景 (北から)



写真 119 調査区近景 (南から)

げていき、D地点においてはアスファルト(厚0.05m)と碎石(層厚0.2m)直下が地山(明黄色に赤褐色が混ざる岩盤風化層)となる(写真123)。D地点以降、碎石の厚みは地点により異なるものの、その直下に地山が検出されている(図50)。D地点は、大学会館の北後背に南西方向に延びて来る丘陵の東斜面から西に派生する低丘陵部分に当たり、丘陵上部を削平して道路舗装を行ったものと想像される。

遺構はE地点において初めて検出された。E地点では、明黄色砂質土の地山上面に幅約0.8mで東から西に走る溝状遺構を検出した(写真124)。埋土は暗灰黄色粘質土であり、部分的に遺構掘削を行ったが、遺構深度は0.05cm程であった。遺物は出土していない。

E地点以南は新教育研究棟新営および正門改修工事に伴い道路が付け替えられた部分^{註2}である。道路は北一南方向に急傾斜で下っている。正門改修等工事は「慎重工事」対応であったため、その一連工事で実施された道路付け替え工事時に立会調査を行っていなかった。今回の再掘削では立会調査にて対応することとなったが、道路の北半部F地点にて明黄色砂質土の地山上面にピットおよび土壌状遺構を検出した(写真125)。ピットは径0.3m程度、土壌状遺構は長軸0.6~0.8mを測る。埋土はいずれも暗灰色粘質土であった。工事の工程上遺構掘削を実施する時間がとれず、やむなく写真撮影と概略図を記録するに留めた。道路の南半部はすでに削平されているようで、アスファルト、碎石下に地山面が検出されるのみであった。

吉田構内男子学生寮周辺は、土地の掘削を伴う工事計画が少なく、発掘調査歴もわずかである。当該地は丘陵と小規模な開折谷が複雑に入り組んでおり、今回の立会調査においてもA~C地点は谷の埋め立て地、D~F地点は丘陵削平地と考えられる。調査の結果通り、削平を受けつつも丘陵地には遺構が埋存する可能性が高く、谷地形においても旧堆積層が遺存していれば良好な遺物包含層が形成されている可能性が残る。

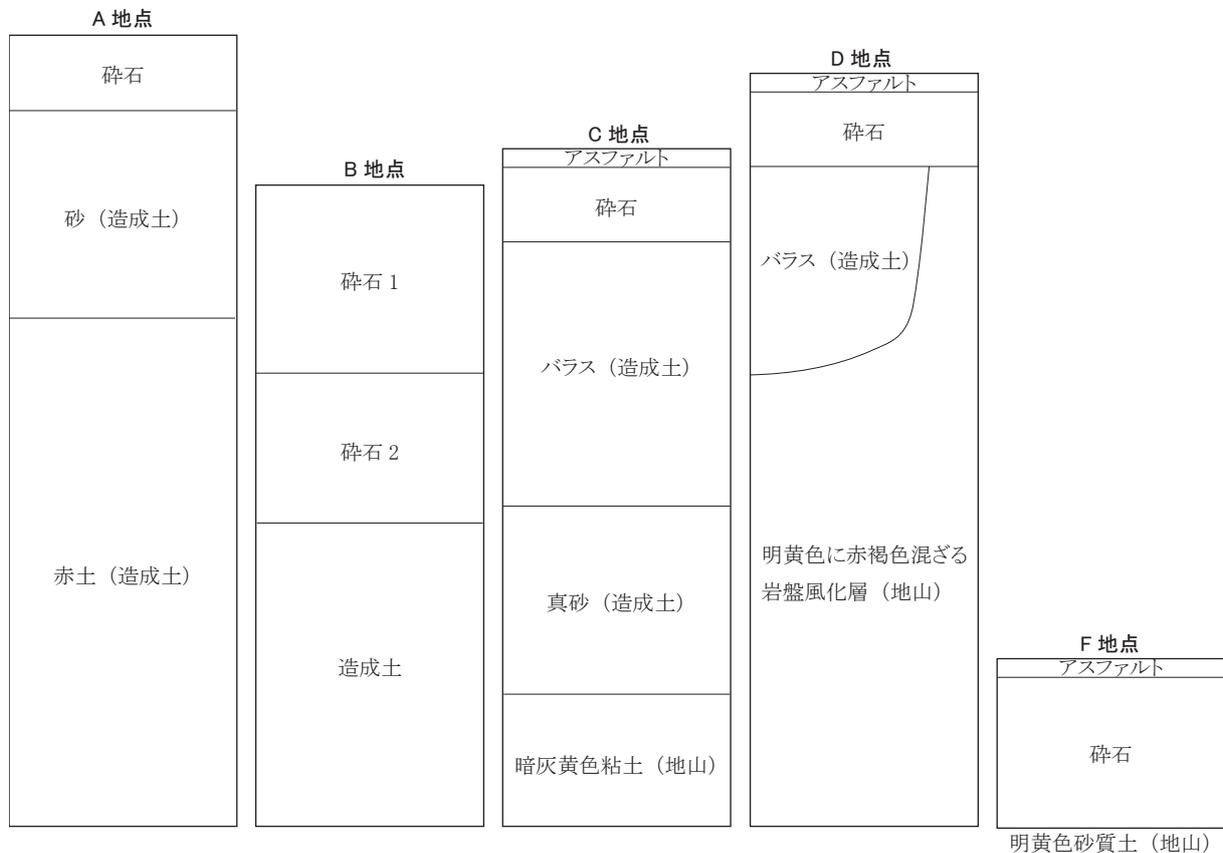


図 50 調査区土層柱状図 (S=1/20)



写真 120 A 地点土層断面 (南から)



写真 121 B 地点土層断面 (西から)



写真 122 C 地点土層断面 (西から)



写真 123 D 地点土層断面 (北西から)



写真 124 E 地点遺構検出状況 (北東から)



写真 125 F 地点遺構検出状況 (北東から)

男子学生寮南西に広がる低地は、かつては農学部附属農場実験水田として存在し、現在は国際・社会連携ゾーンとして空閑地のまま残されている(図107)。発掘調査歴としては、わずかに吉田地区統合移転時に実施された山口大学吉田遺跡調査団による発掘調査記録^{註3}が残されるのみである。学部校舎等が密集する構内中央部には、現在空閑地と呼べる場所が存在しない状況にあり、将来的な新規建物建設には当該地が予定地として当てられることが予想される。そのような場合に備え、周辺地における掘削工事においては常に地下の状況を確認しておく必要がある。

【註】

- 1) 河村吉行(1982)「昭和56年度山口大学構内吉田遺跡調査の概要」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報Ⅰ』,山口
- 2) a: 田畑直彦(2012)「新教育研究棟設備関連工事に伴う本発掘調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口
b: 横山成己(2012)「正門改修等工事に伴う立会調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学埋蔵文化財資料館年報－平成20年度－』,山口
- 3) a: 山口大学吉田遺跡調査団(1976)『山口大学構内吉田遺跡発掘調査概報』,小野忠熙(編),山口
b: 豆谷和之(2000)「吉田遺跡第Ⅰ地区D区の調査」,山口大学埋蔵文化財資料館(編)『山口大学構内遺跡調査研究年報ⅩⅢ』,山口

23. ラグビー場排水整備工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内E-20区、F-21区

調査面積 58.6㎡

調査期間 平成22年2月12・13日

調査担当 横山成己

調査結果

吉田構内南西部に位置するラグビー場南西端部において、排水整備工事が計画された。本工事に関しては、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて新規事業計画書が提出されていたが、掘削場所や着工時期が未定であったため、埋蔵文化財保護対応は保留されていた。平成21年度後半に至り、工事の詳細と着工時期が確定したことを受け、館長、副館長、館員の協議により、工事中の立会調査を実施することが決定された。

排水整備工事は、幅約0.7m、深さ約0.6～0.65mで総延長82mを掘削し、U字溝を埋設するものである。掘削は2日間をかけて行われるため、2地点において断面確認調査を実施した(図51)。

A地点では、現表土下0.5mに黒褐色粘質土を確認した(写真126)。層厚は0.1m以上であり、旧耕土もしくは遺物包含層と見られる。

B地点も現表土下0.51mに黒褐色粘質土を検出した(写真127)。この黒褐色粘質土は、所々造成土により隠されながらも掘削路全域に広がっている。立会中に遺物は確認されなかったが、調査地周辺は盛土が薄く、黒褐色粘質土下に遺構面が残されている可能性が高い。運動場であるため地下の掘削を伴う工事計画は設備工事以外に考えがたいが、今後とも慎重な埋蔵文化財保護対応が必要である。

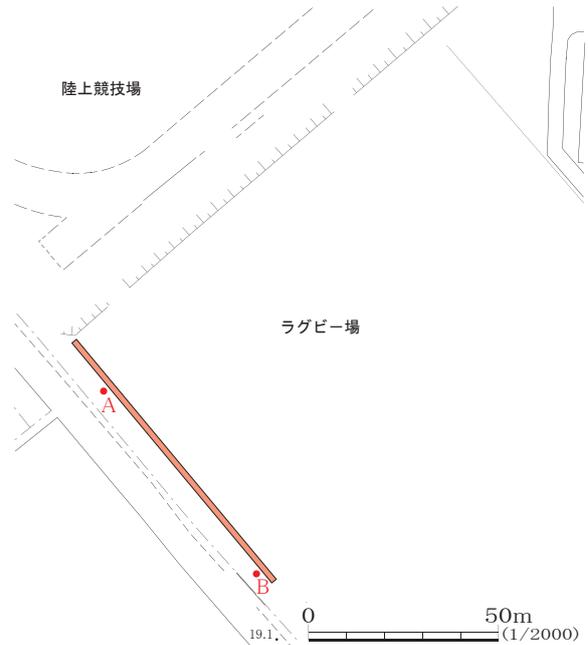


図 51 調査区位置図



写真 126 A 地点土層断面 (北から)



写真 127 B 地点土層断面 (北東から)

24. アーチェリー場整備工事に伴う立会調査



図 52 調査区位置図

調査地区 吉田構内N-7・8区、O-7・8区

調査面積 750m²

調査期間 平成22年2月23日・3月19日

調査担当 横山成己

調査結果

男子学生寮(吉田寮)北東空閑地に新男子学生寮が建設されることとなり、当該地に設置されていたアーチェリー部の練習場が使用停止となった。学生支援部により、新男子学生寮の北東丘陵斜面を削平し、アーチェリー場を新設する工事計画(図128)が提出されたことを受け、工事中の立会調査の実施が決定された(平成21年度第5回埋蔵文化財資料館専門委員会:平成21年7月29日開催)。

削平が予定されている丘陵の北西部には、谷を挟み別丘陵が南東方向に伸びている。この丘陵の南東斜面中腹に、古く6基の横穴墓が発見されており、大正7年(1918)の発掘により、7世紀代の須恵器、土師器、金環、鉄刀、人骨等豊富な遺物が発見されている(写真129)。遺跡は現在「日吉神社横穴墓群」と呼ばれ、現在でも見学可能である。出土品は一括して山口県立山口博物館に収蔵されている。

日吉神社横穴墓群の対岸地における丘陵削平計画を受け、工事前の1月に複数回踏査を実施したが、横穴墓らしき落ち込みや窪みは確認されなかった。慎重を期し、削平後の2月23日に丘陵断面の確認調査を行った(写真128)。

結果、横穴墓の残骸らしき窪みも確認されず、当該地には墳墓が造営されていないことが再確認された。

吉田構内では、大学会館北後背に聳える丘陵東斜面に横穴墓1基が現存している(本書44～46頁参照)が、丘陵地の踏査は不十分であり、未発見の横穴墓が存在する可能性も残されている。時期を見て踏査を進めたい。

【註】

1) 石川卓美(1990)『〈増補〉平川文化散歩』,山口



写真 128 丘陵断面(西から)



写真 129 日吉神社横穴墓(南から)

25. テニスコート改修工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内C-17区、D-16・17区、
E-15・16区

調査面積 18.3㎡

調査期間 平成22年3月26日

調査担当 横山成己

調査結果

吉田構内西端部に位置するテニスコートにおいて改修工事が計画された。本工事に関しては、平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて新規事業計画書が提出されていたが、改修内容や掘削場所、着工時期が未定であったため、埋蔵文化財保護対応は保留されていた。平成21年度末に至り、工事の詳細と着工時期が確定したことを受け、館長、副館長、館員の協議により、工事中の立会調査を実施することが決定された。

工事では、審判台を設置するため、テニスコート中央8ヶ所(A～H調査区)に基礎設置のための掘削が行われた(図53)。掘削の平面規模はA調査区が1.8m×1.8m、B・C・E・G調査区が2.0×1.7m、D・F調査区が2.4×1.7m、H調査区が3.0×1.7mである。掘削深度はいずれも0.8mであった。

全調査区において、碎石下に1～2層の造成土を確認し、その下位に明黄色粘土層を確認した(写真131)。一見地山状の土であるが、所々にブロック状に灰色粘土が混ざる状況から、これも大学造成時の客土と判断した。

既往の調査に目を向けると、平成7年度に実施されたテニスコートと陸上競技場の境界部において実施された公共下水道接続工事に伴う試掘・事前調査において、柱穴や土坑、溝、河川跡など遺構が多数検出され、弥生土器、土師器、石鏃などの遺物の出土を見ている。テニスコート敷地においても掘削深度がさらに深まれば、遺構が検出される可能性が高い。今後も慎重な対応が求められる。

【註】

1) 報告書未刊。

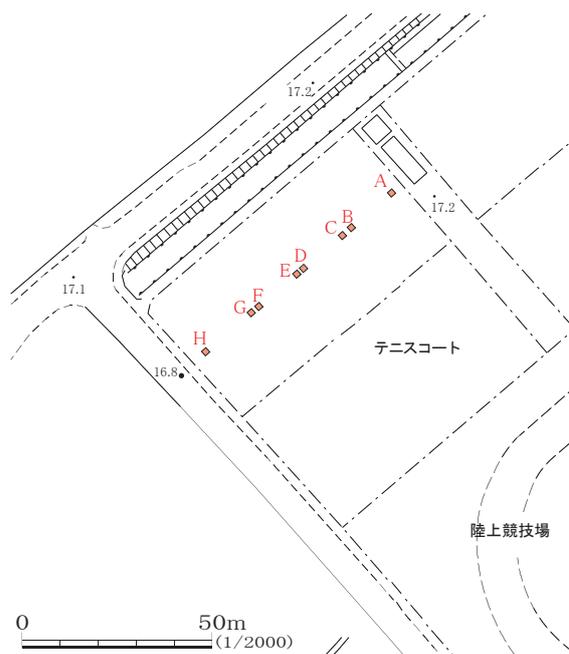


図 53 調査区位置図



写真 130 調査地全景 (北東から)



写真 131 D 調査区北西壁土層断面 (南東から)

26. 共通教育講義棟改修工事に伴う立会調査



図 54 調査区位置図

調査地区 吉田構内L-17区
 調査面積 11.6㎡
 調査期間 平成22年3月15日
 調査担当 横山成己
 調査結果

吉田構内中央部に位置する共通教育講義棟の改修工事が計画された。当工事も平成20年度末に開催された第10回埋蔵文化財資料館専門委員会にて新規事業計画書が提出されていたが、地下の掘削を伴う工事範囲や着工時期が未確定であったため、埋蔵文化財保護対応は保留されていた。平成21年度末に至り、工事の詳細と着工時期が確定したことを受け、館長、副館長、館員の協議により工事中の立会調査を実施することが決定された。

講義棟改修工事では、関連設備工事として建物北東部に新規配管設置工事が計画された(図54)。建物改修工事が最終盤を迎えた3月より配管工事が着手され、3月15日に立会調査を実施する運びとなった。当日は降雨に見舞われ、管路の大半が水没していたため、比較的土層断面の精査が容易であった管路上手において断面観察を行った。

確認した層序は、①アスファルト(厚0.05m)、②砕石(層厚0.1m)、③灰黄色砂礫(層厚0.3m)、④灰色砂礫(層厚0.2m)、⑤黄色シルト(層厚0.1m以上)である(図55、写真132)。

最下層の黄色シルトは地山で上位2層の砂礫は河川堆積と思われたが、掘削範囲内でその広がりを確認できなかったため断言できない。周辺地で地下の様相を観察できる機会を待ち、再度報告を行いたい。



写真 132 丘陵断面(西から)

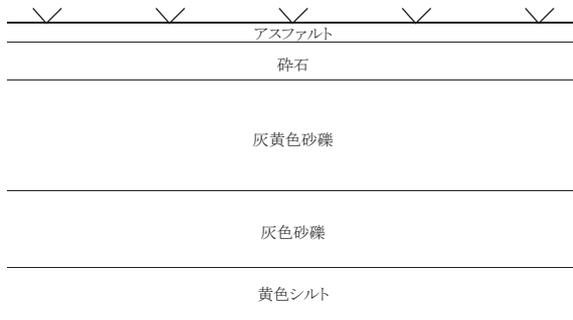


図 55 土層断面模式図 (S=1/20)

27. 石彫実習場整備その他工事に伴う立会調査

調査地区 吉田構内N・O・P-8、Q-9区

調査面積 約33㎡

調査期間 平成21年9月8・15・17日

調査担当 田畑直彦

調査結果 吉田構内において、教育学部美術教育専修(美術教育教室)で使用する石彫実習場の整備工事が決定し、掘削工事がA地点(プレハブ設置)、B～F地点(電柱)、G地点(進入路法面拡幅)の合計7箇所で行われることとなった。工事箇所周辺においてはこれまでほとんど調査が行われておらず、地下の状況が不明であることから、立会調査を実施することになった。

調査の結果、A地点では現地表下10cmまで掘削が行われたが、表土の範囲内であった。B地点では現地表下約160cmまでが造成土・耕土で、約160～217cmがオリーブ黒色(5Y3/1)シルトであった。同層から遺物は出土しなかったが、遺物包含層の可能性はある。C地点では現地表下約20cmまでが表土、約20～110cmが地山であるにぶい黄褐色(10YR5/4)粘質土、約110～160cmが橙色(2.5YR6/6)粘土であった。D地点では、現地表下約32cmまでが表土で、約32～36cmが地山であるにぶい橙色(2.5Y6/4)粘質土、約36～180cmが橙色(5YR6/6)・灰白色(5YR8/2)の岩盤風化土であった。E地点では現地表下約150cmまでが造成土、約150～170cmが旧耕土と考えられる緑灰色(5G5/1)シルト・暗緑灰色(5G3/1)シルトのブロック土であった。F地点では現地表下約150cmまで掘削を行ったが、すべて造成土の範囲内であった。G地点では現地表下30cmまでが表土で、以下96cm(道路面)まで橙色(7.5YR6/6)粘質土の地山であった。

今回の掘削工事により、埋蔵文化財は一切認められなかったが、調査区一帯の地下の状況については不明な点が多いため、今後とも埋蔵文化財の保護に注意が必要である。



図56 調査区位置図



写真133 B地点土層断面(南東から)



写真134 G地点掘削状況(南東から)